

放送人の会

No.83

2019.2.15

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.jp発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉
菅野高至 (HP担当)、逸見京子、前川英樹、松尾羊一編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、
事務局 千葉邦彦 須斎恵美子

平成という時代の終りに

放送人の会 会長 今野 勉

平成という時代が終る。

思えば、平成元年(1989)は、東西冷戦の終結の年であった。民主主義と自由主義が世界の主流となっていく、と誰もが思った。新天皇・皇后は、その時代の幕開けに相応しい優しさと親しみの持ち主であった。

これも「思えば」であるが、お二人の婚禮パレードの日、昭和34年(1959)4月10日のテレビ中継の手伝いが、私のテレビ歴の始まりであった。

あの日から60年、今、平成は終わろうとしている。世人の見るところ、民主主義と自由主義は、予想に反して、ヨーロッパでもアジアでも中南米でもアフリカでも中近東でも、無残な様相を呈している。

そして、テレビも岐路に立っている。

放送と通信

言うまでもなく、「通信」というインターネットが、「配信」という形で、動画を個々人の受け手に届ける事態になってきた、ということだ。「放送」という形で動画を視聴者に届ける、というこれまでのあり方を、「通信」が脅かしはじめているのだ。

こうした状況を関幸子氏(ローカルファースト研究所)はこう表現している。

「最近では、テレビとネットを組み合わせ

て情報を獲得するのは当たり前で、ドラマや音楽、スポーツを、いつ、どの媒体で見られるかに視聴者の関心があり、放送や配信元がどこか気にしていない。その意味では、放送と通信の融合はすでに進んでいるのだ」(毎日新聞1月30日)

それを裏つけるのが、モバイル(ガラ系とスマホ)の世帯普及率94.8%という数字だ。おまけに、今では、ネット配信をテレビモニターで見ることが出来るのである。

放送人とは誰か

ネットの配信業者とテレビ局は、市場を争うライバル同志である。配信業者は、そのコンテンツの制作を、映像制作会社に委託する。放送局もまた、かなりの割合のコンテンツを映像制作会社に委託する。

私たち「放送人の会」の会員の多くは、放送局の出身者・在籍者か、放送番組制作会社の出身者・在籍者である。

しかし、これからは、放送番組の制作会社は、どうぜんネット配信のコンテンツも作るようになるだろう。なるだろうというよりは、そうしたいと望んでいることだろう。

「放送人の会」としては、どうするべきか。放送のライバルであるネット配信のコンテンツを制作する会社(人)は、放送人の会に入

れないのか。

まあ、今の規約では「放送文化に関心のある人」なら誰でも入会できることになっている。活字メディアの人も大学の先生も評論家も入会している。

それはそれとして、問題になることはないだろうが、問題は「放送人」と枠づけることで生まれる「会の目的」は、これからのメディア状況に積極的に関わられるものであるのか、ということであろう。

「放送人」とは誰のことなのか。放送人が集まって何かの目的のために活動しようとするとき、その目的とは何なのか、ということが問われることになるだろう。

遊牧民という考え方

先日、カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドール賞を獲得した業績で朝日新聞社の朝日賞が監督のは枝裕和氏に授与されることになり、贈賞式に招かれ出席した。是枝氏の肩書は「映画監督・テレビディレクター」であった。映画とテレビの境はないという氏の意思を表すものだ。そう読みあげられるのを聞いて、かつて彼が書いたある言葉を思い出した。

「放送を含むメディアは遊牧民であるべきだ」。一カ所に定着することなく未知なるもの異種なるものと出会い、それらを理解し学び、それによって自らも強くなりまた別の場所を求めていく。つねに動いていく。平成が終り新しい時代を迎えるための言葉として受けとめておこう。

年頭所感 2019 (氏名50音順)

痺くを ギュギュギュと読んで初笑い

荻野慶人

「賀正」とか「迎春」と書かれた年賀状が届いて、今年86歳になる僕は不快になった憶えがない。これら二文字の賀詞は敬意や丁寧さを欠くので上司や目上には失礼で、「謹賀新年」「恭賀新春」などが適切だろうだが…。

あるグループの代表は「忘年」という概念を好まず「年末懇親会」と称する。何もかも忘れてしまつては来る年が成り立たないから、僕も大いに共感する。

ジャーナリストの大御所・細川隆一郎さんと若手の小西克哉さんのテレビ対談が面白かった。大阪に単身赴任中の一室で観ていたから平成の初期のことだ。嘗てテレビ(白黒・洗濯機・冷蔵庫が「昭和の三種の神器」と呼ばれたが、やがてカラーテレビ・クーラー・カーの3Cを経て「新三種の神器」はDVDカメラ・DVDレコーダー・薄型テレビのデジタル家電だ…などという話題になり、「神器」を細川さんは(シンギ)、小西さんは(シンキ)と言う。何度も出てきたが双方頑固に我を貫き詰りしようとしなかった。

連続ドラマ『河内カルメン』を演出してい

きた沖繩への熱い想いを語るとともに、近年多くなつてきた外国人労働者を国民が暖かく迎えることを願うとまで述べている。今の天皇は民主主義、世界平和、国際協調、人権尊重といった戦後の日本が大事にしてきた価値観をよく理解されており、失礼を顧みず私なりに評すれば、「戦後民主主義教育の申し子だ」と思う。

被災地の避難所で、床に膝をついて被災者と同じ高さの目線で話す姿に、新しい時代の象徴天皇の在り方を感じた国民は多かつたろう。私も好感をもつて見てきた。しかし、先日、テレビを見ていて気になることがあつた。大相撲を見物した両陛下が退席されるときに、会場から万歳が起つたのである。私の記憶では、新年や天皇誕生日の皇居での一般参賀は別として、相撲見物では、これまで万歳はなかつたように思う。誰かが意図したのではなく、自然に起つたのかも知れないが、天皇を再び高い所へ祭り上げようとしているようで気になつた。自民党の改憲案を含め、天皇を元首にしようという意見が根強くある上に、「戦後レジームからの脱却」を唱える人が政権を握っている今、主権者たる国民は天皇が再び政治に利用されないよう注意深く見守る必要があるだろう。

次の天皇が、あるいは何代か後の天皇が、再び軍服を着て国民の前に現れることがないよう心から願う。

恭賀新年

二〇一九年(己亥)元旦

北村美憲

日本人が年齢を満で数えるようになったのは一九五〇(昭和二五)年からのことで、それまでは生まれた時が一歳、正月が来たら全員一緒にひとつ齢をとりました。わたしは還暦を過ぎるころまでは、満年齢でも数え年でも、どうでもよいという気でしたが、その後、七十五年、八十年、生き抜いた後になつてその齢だというのは、随分と人生をバカにした考えではないかという気がしてきたのです。その元凶は、生まれたときを0歳とする数え方です。確かに0は1の前の重要な整数ではあるが、「ことの始まり」を示す数ではない。始まる前の虚無の状態なのです。紀元0年というのはありません。小学0年生もない。どうしても0歳と言いたければ、受精卵が着床してから誕生までの期間がそれに当たるでしょう。偶然の結果に過ぎない誕生日は個々人が祝えばよいので、それで年齢を決める社会的意味は本来あり得ない。

という次第で、原則的にも実際にも正当な東洋の考えに従つて、わたしは今日、八十七歳になり、来年は米寿を祝います。

時代を記録する 小池 勝次郎

2019年(平成31年)がスタートした。

た僕は、山田五十鈴さんが脚本に印刷された「体」を河内弁の(カダラ)と読むのに「さすが!」と驚かされ、『女たちの大坂城』で浜木綿子さんに「これはギャクテと読みますか? サカテと読みますか?」と問われた。若い日の芦屋小雁さんは本読みで「痺く」を(ギュギュギュ)と読んだ。これは僕が直に聞いたのではなく藤本義一さんの話だ。

戦争のなかつた『平成』

加藤滋紀

平成が終わるといふことで、平成という時代あるいは天皇について、さまざまな報道があつたが、私は十二月三日の天皇の誕生日記者会見が一番強く印象に残つた。中でも、「平成が戦争のない時代として終ろうとしていることに、心から安堵しています」と、天皇が声を話まらせながら述べられたのには、強い共感を覚えた。明治以降の四代の天皇のうち、軍服を着ることがなかつたのは平成の天皇だけであり、安堵という言葉が使われたのも理解できる。

その記者会見の中では、災害現場で出会つた人々へのいたわり、苦難の歴史を歩んで

正月には、赤坂の豊川稲荷に初詣に行くのが恒例である。晴れ着姿で写真を撮る母娘がほほえましい。ここに参拝する人々の表情や雰囲気を見ながら、これからの日本にどのような動きと変化があるのか、我が家はどのような年になるのかと思いを巡らせる。

今年4月末に天皇が退位され31年間の平成が終わり、5月1日に新天皇が即位される。いま各テレビ局は、天皇退位と即位に向けて特別番組の制作準備に入っている。

1989年、今から30年前の1月7日は、昭和天皇が崩御した日である。この昭和の終わりに向けてアメリカ、ヨーロッパ等を一年がかりで取材し制作放送した「昭和天皇崩御特別番組」の作品の数々は思い出の記録である。昭和天皇の誕生から太平洋戦争そして戦後の高度成長、崩御までを6時間余にまとめた「昭和史と天皇」(ナレーター 松本幸四郎! 現白鷺)は、まさに激動の時代の集大成であった。当時、手帳に記した「人日や道灌堀に昭和ゆく」の拙句が懐かしい。

かつて亡父が、「明治は遠くにけり」と言っていたが、私にとっては「昭和は遠くにけり」である。

昭和の終焉を経て次は何を企画すればと考えたどり着いた作品が、ペレストロイカに揺れるゴルバチョフ共産党政権下のソ連邦の激動を3年余にわたり記録した「感動!そして発見!ソ連横断4万キロ・3部作」(日テレ放送)である。西側テレビ・メディアとして鉄

のカーテンに閉ざされたソ連邦を、ナホトカからカリニグラードそしてモスクワまで車で初めて大横断し記録した作品は、崩壊して行く国家と苦悩する人々の姿を描きながら祖国とは何かを見つめた。

ソ連邦崩壊から四半世紀たった2015年、もう一度あのソ連邦をこの目で検証してみようと考え、ジャーナリスト池上彰さんに出演をお願いした「池上彰が見た!ロシアの真実」(BS日テレ放送)は、ウクライナの領土だったクリミアをロシアが併合した厳しい状況を記録、長年探し求めていたラーゲリ(収容所)から遺書を友に託し死したシベリア抑留者の極秘未公開資料をモスクワの国立軍事公文書館でスクープし、ハバロフスク郊外の日本人墓地に眠る墓前に報告した。

今年安倍首相とプーチン大統領との間で、日本とロシアの平和条約交渉が本格化している。果たして北方領土問題は解決するのか? 日露関係は進展するか? これら30年余こだわり続けたテレビ企画の原点は、シベリアに抑留され苦難を体験した60余万日本兵の一人が私の父だったからである。昭和を生きた父親の軌跡をたどりつつ日露の前途を見つめたいと思いは、新しい元号の時代へとつながって行く。いまロシア企画第3弾の準備に入っている。

「平成」を越えて

佐々木光政

「放送人の会」に入れて頂いてから早いもので5回目の春を迎える。自分が報道番組の「ディレクター」として走り回っていた昭和の時代に比べても、社会は激動化し日常生活のテンポが速くなり、災害も多発する平成の時代であったが、その御代も4月で終わる。5月から改まった元号での新しい和暦が始まるが、元号の発表がギリギリまで行われないうち、私共の仕事で使用する年号は、業務上は和暦から西暦表示を用いることにこのたび大きく舵を切った。

年度の進行のなかで、年数の教え方の連続性を確保しないとむしろ予想外の弊害が出かねないとの検討結果で、日本の公共放送の記録や正式文書は以後すべて西暦使用となったのである。これをどう論評すべきか、私には定かではない。

予め改元が予定され、年度の途中で実施されるという前代未聞の一年の始まりである。「五年今年貫く棒の如きもの」

無論のことではあるが虚子の句をひくまでもなく、我々放送人の信念や志は、元号・年号や暦の数字で左右されることは無い。

皆さま、本年もよろしくご指導下さいませよう。(63歳・NHKグローバルメディアアサービス 勤務)

明けましておめでとうございませす
杉田成道

【七十過ぎの子育て日記 その十六】

一道、17歳。有、15歳。窓子、11歳。実(みのり)、2歳9ヶ月。

×月×日 遂に後期高齢者群に入れられる。保険証も変わる。免許証更新も変わる。試験場に行けば、まずは認知症テストから強制される。幾度もくどくど説明する教官の蔑(さげす)んだ顔。バカにするな、下等生物じゃない人間だ、と憤怒にまみれて答案見れば、たくさんの絵の記憶やら、数字の配列やら、冷や汗タラタラ。やっぱりボケたか、とめげる。98点。ヤッター。待てよ、喜んでどうする?

×月×日 小五の窓子、突然の宝塚狂い。

何だ!これは?朝から晩まで、宝塚チャンネルが大音量で止(とど)まるところ知らず。

拳句の果てに、「私、宝塚入る!」。ちよつと止めてくれ!鏡見てから言ったらどうだ!喉から出かかる言葉を呑み込む。老人の繰り言としか、聞いてはくれぬ。嗚呼。

×月×日 仕方ないから一歳半の娘を膝に、宝塚を観る。右手(めて)に血潮たぎる真っ赤なワイン、左手(ゆんで)に可愛い半裸の女。極楽、極楽。人生捨てたもんじやない。悦に入った瞬間、「ミーちゃん、ウンコー」。やれやれ、これも仕事の内。ハイ、終わり。「よかったです!。パンツ!」。マア、いいか...

×月×日 津川雅彦さん逝去。僕のラジオドラマが最後の作品となる。20有余年に渡る「厚情に深く感謝」

「ゆく川の流れば絶えずして、しかもとどの水にあらず」

人は7年で、骨を含めたあらゆる分子が入れ替わるという。つまり7年でもう一人の自分になる。もう7回も入れ替わったか。あと1回有りや無しや。さすれば、一瞬の光芒は今に在り。今より他に、生くる時はなし？蛇足ながら、いつまでお会いできることや。

本年もよろしくおねがいいたします。

市川森一さんの「論集」を刊行

鈴木嘉一

NHK大河ドラマのヒット作「黄金の日」や第1回向田邦子賞を受賞した「淋しいのはお前だけじゃない」などの名作で知られ、優れた脚本家として活躍した市川森一さんが70歳で亡くなってから、早いもので7年たつ。「市川さんの論集を出そう」という話が盛り上がって「市川森一論集刊行委員会」が発足し、昨年11月、「脚本家市川森一の世界」(377ページ、定価2800円)を市川さんにゆかりのある長崎文献社から刊行した。

刊行委員は、長崎県諫早市にある市川さんの母校・鎮西学院の後輩に当たる森繁一郎・前鎮西学院院长、市川美保子夫人、元NHKブ

ロデューサー高橋康夫さん、脚本家の香取俊介さん、「月刊ドラマ」を発行している映人社代表の辻*萬里さん、そして私の6人。寄稿を依頼する候補者への交渉、インタビュー、座談会、写真集め、年譜作りなどを分担した。

本書には、刊行委員も含め19人が登場する。松本白鸚さん、西田敏行さん、三田佳子さん、役所広司さんらの俳優、市川作品を演出した元TBSの堀川とんこうさん、元NHKの村上佑二さん、元北海道放送の長沼修さんのほか、同じ脚本家の立場から池端俊策さん、井上由美子さんが寄稿してくれた。日本大学藝術学部の後輩でもある三谷幸喜さんは、「あくまでもミラーな一ファン」として市川作品から受けた影響を語っている。

市川さんは日本放送作家協会理事長を10年間務め、自ら提唱した「日本脚本アーカイブズ」設立運動の先頭に立った。これと並行して、アジアの放送作家が集う「東アジアドラマ作家会議(現・アジアドラマカンファレンス)」を推進した。また、郷里の長崎では長崎「旅」博覧会プロデューサーや諫早市立諫早図書館名誉館長、長崎歴史文化博物館名誉館長などを引き受け、地元の文化行政に対しても積極的に提言してきた。本書では、「大人のメルヘン」と呼ばれる独自の作風を確立した市川作品の魅力はもとより、市川さんの多面性を浮き彫りにしたと自負している。

右から3冊目のシニエウは卓一

かなしみの片手ひらいて渡り鳥

嶋田親一

この句が頭にこびりついて離れない。東京新聞の「筆洗」で知った。詠んだのは、人口知能(AI)だったからショックだった。なるほど渡り鳥の群れが片手に見えるのか。時はまさに「平成」に別れを告げて、新しい年号はこの四月に発表されるという。

昭和六年生まれの私は、満洲事変の年に生をうけ、そのまま突っ走ってきて、「平成」はあつという間にたつてしまった三十年なのだ。私は高校生になった時から「演劇」に魅かれた。「放送」はNHKしかない別世界。劇団新国劇の文芸部で丁稚小僧時代を過す。劇団は終演後、徹夜でラジオ出演のアルバイトをするようになったのがラジオ東京発足の頃。『鞍馬天狗』を島田正吾が演じ、徹夜の弁当をくはっていたのが、放送の初仕事。まさかの後年、ラジオ局に入り、テレビ局に異動するなど知る由もない。

すべては時の流れ。影響を与えてくれたのが師であつた先輩。思えば池波正太郎さんとぶつかったのが直接の動機。なつかしい。なにが原因で歴史が変わるのか自分自身で驚いている。かくして、私は「演劇」と「放送」の間をひたすらさまよいながらこうして「生涯現役」を意地でも貫こうとしているわけである。

間もなく「平成」ともさらば。新しい時代

は、今まで夢の世界だった人工知能(AI)が待っている。句の余韻が胸に迫る。

「かなしみの片手ひらいて渡り鳥」

父を見送つて

千葉邦彦

昨年5月13日(日)の朝日新聞「戸欄」に、『もうすぐ100歳』に励まされ」と題した私の投稿が掲載された。少し長いが、まずそれを紹介する。

96歳の父の通院に付き添った。血液検査の車椅子ブースで看護師に「採血しにくいと思います」と伝えると、「大丈夫ですよ。血管、お若いですよ」と優しく返してくれた。そして彼女は、父の顔を覗き込んで、「もうすぐ百歳ですね。素敵ですね」と言った。父は照れ笑いしながら「えへへ」と答え、看護師も「えへへ」と笑った。日頃父に「長寿ですね。お元気でですね」と言ってくれる人は多い。しかし、「もうすぐ百歳ですね」は初めてだった。さらに「素敵ですね」と続いたのがそれこそ素敵だった。父は百歳を目標と認識し、百歳になるのは素敵なことなのだと思っただろう。医療側の温かい言葉は患者を、高齢者を元気にする。この日は医師との会話も弾んだ。心臓ペースメーカーの電池寿命があると2年半と説明され、父は「それまで自分もつかない」と冗談を言った。今でこそ心臓や脚が弱っているが、父はもともと陸上競技の選手で、1964年の東京オリンピックで

はマラソン競技の審判員をつとめた。その様子が市川昆監督の記録映画に映っている。それから半世紀あまり、2020年東京オリンピックが近づいてきた。そのとき98歳の父を筆頭に3世代で、できれば4世代で観戦したいと思う今日この頃である。(以上、掲載時に圧縮される前の原文)

その父が11月26日(月)朝、自宅で倒れた。駆けつけた救急隊による懸命な救命措置がなされたが、救急車内でも搬送先の病院でも意識は戻らなかった。多臓器不全との診断だったが、苦しまず、安らかな表情であった。

父、千葉忠雄は熱心な教育者だった。信州の小学校、東京の中学校で教壇に立ち、校長職を最後に退職した。いっどのようなときも生徒のことを一番に、一番大切に考える熱血教師で、生徒から人気があった。日常生活でも正義感の強い、高潔な人だった。

元気の塊だった父も、この2年ほどは在宅療養状態であった。亡くなる前日の夕方に腹痛を訴えたので、休日外来に連れていった。介護タクシーの車内で不意に、「無理するなよ」と私に言った。車窓をよぎる二の酉の提灯を眺めながら、2度はつきりと言ひ、「おまえは責任感が強いから」と続けた。四半世紀前に私が仕事で苦勞していたことをずっと覚えていたに違いない。その頃私は、父とは正反対のような人たちと対峙していた。父譲りの「曲げない、折れない」性格の私の様子を見て心配していたのだと思う。この「無理するな

よ」が父の私に対する最後の言葉になった。「分かった。無理はしませんよ」と父に誓おう。

1月13日(日)、四十九日の法要のあと、目白駅前のレストランで会食をした。学習院を眺める大きなガラス窓から溢れんばかりの陽光が射しこんでいた。それは、父を次の世界へと導く道筋のようにも思われた。2020東京オリンピックも、オリンピックを題材にしたNHK大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック』も一緒に見ることは叶わな

かったが、遙か天界のフィールドを、人々の声援を受けて韋駄天の如くに走っている父の姿が見えるような気がしている。

初春

辻本昌早

2月24日(日)深夜、NNNドキュメント19で「化学物質過敏症」を放送します。ぜひご覧ください。

年頭所感

藤田知久

今上天皇の退位、新天皇の即位を控える今年、様々な業界で「平成の総括」がなされている。放送というメディアも例外ではない。私が実感する平成という時代は「テレビというメディアの衰退」である。特に私が関わっ

てきたドラマというジャンルでは著しく、質量ともに下降線を辿っているように感じる。

俗に「衰退したものを盛り返すには、最初に築き上げるまでの倍の時間がかかる」という……平成が衰退の30年余りと考えると、今から手当りに取りかかっても、再びドラマが質量ともに復活するのは60年後ということになる。今年65歳、高齢者となった私の人生には間に合いそうもない。

何とも寂しい年頭所感で、諸先輩から叱られそうだが、「だからこそ絶好のチャンス！」と現場で活躍する後輩諸氏に受け取ってもらいたい一心で記した。

『流行りのタレントありきの企画』『売れる原作の映像化』『思いつき優先の発想』……偉そうにそれが悪いと言い切れるほどの私ではない。しかし「果たしてそれでいいのか?」という見直しは常に必要だと思う。『企画あつての配役』『放送人ならではのオリジナル作品』『掘り下げの効いた発想』……今年スタートする平成後の時代、是非そんな兆しをテレビ画面から感じたいと念じて止まない。

ス・ペインをテレビと読め!

前川英樹

去年、どういわけかどうしてもタイムイングが合わずにピューターブリューゲルの『ベルの塔』展に、行かれなかった。悔しいの

で図録の他にブリューゲルの画集や解説書など数冊まとめて取り寄せた。ページを捲っていて驚いた。代表作と思っていた『イカロスの墜落のある風景』が、ブリューゲルの手にやるものではないと書いてある(「ブリューゲルとネーデルランド絵画の変革者たち」幸福輝)。吃驚だ。しかも、「真贋を超えた先品の力」とも。「ブリューゲルのオリジナルを早期に模写した良質な複製画」(ウィキペディア)だそう。『雪中の狩人』と並んで凄く好きな画なのに。

書架に『イカロスの墜落のある風景』(船橋晴雄 創世記社 1989年)という本がある。サブタイトルは「欧州経済史紀行」。ヨーロッパの中世から近世にかけて栄えた十四の都市の物語で、太陽に近づきすぎて墜落したイカロスの寓話に託して、繁栄を極めた後に衰退していく都市の様子が描かれているのだが、それは高度成長を遂げた日本の将来に通じるのではないかと著者は察しているのだ。著者は大蔵省の人で、欧州共同体日本政府代表の一員としてベルギーに駐在した経験がこれを書かせたという。こういう知性のある役人がいると思うと少しホッとす。

その中の一章、「バルセローナの船 大航海時代の光と影」の終わりにこうある。
「富は獲得するものであると同時に、何らかを失うものであるかもしれない。人はあれもこれもすべて所有することはできないのである。スペインは新大陸から莫大な富を獲

得した。そのかわりにスペインは宗教的情熱に燃えた強靱な騎士層や、ようやくにして発展せんとしていた中産階級のブルジョアジ、そういったスペインの真の富を失ったのであった。帝国の外延が拡大すればするほど、帝国の内部の弱体化が進行する。この歴史のアイロニーからスペインもまた免かれることは出来なかつたのである。」

TBSのメディア企画担当として（ハイビジョン→BS参入→地デジ）という展開の中でテレビジョンの在り方を考えていた時にこの本に出会い、（スペインをテレビと読め）という思いでこのフレーズを何度も引用したものであった。あの頃、テレビは構造的変化の様々な予兆に気づき始めてはいたが、ただその影響力は圧倒的だった。「だから、今のうちに自ら変われ」と私は思っていた。結果として、テレビはメディア環境の変化には相応に対応したと思うけれど、テレビそのもののあり方は果たしてどうか。

そう、テレビは今「歴史のアイロニー」の中でどのようなポジションにいるのだろうか。「放送人の会」の仕事は、「テレビの真の富」は何かと問いかけて、その答えを探りつつテレビの位置取りのための地図を作ることではなかるうか。墜落するわけにはいかないのだから。

『イカロスの墜落のある風景』は好著である。出来ればもう少し知られてもよいように思う。しかし、ブリュゲルの名画に託して

書かれたこの本が再刊されるとしたら（可能性は薄いだろうが）、タイトルはどうするのだろう。アマゾンで見ると、古書が1円出ていた。ちよつと哀しい。

平成老人のつづやき 松尾羊一

平成という元号がなくなるが、戦前戦中そして、疾風怒濤の長い昭和を体験した昭和っ子にとって、なんとなく時代の個性が薄い31年間だったような気がする。15年しかなかった大正時代にしても国家主義風な武骨な明治とはちがいで、自由な雰囲気があった。特権的な侍文化ではなく、町民的な庶民文化、大衆文化が浸透した。

さて昭和後期のカッコいい文化が平成に入るとカワイイ文化、散漫ないわばバラエティー文化に変化した。バラエティーとはエリート不在の、誰もが参加できる環境文化もしくは若者中心の文化である。

平成時代とは若者に託した身軽な季節なのだが、総じて今の若者は欲がないらしい。昭和の激烈な若者文化に比して縁遠い存在にみえる。

65〜6歳台で一斉に退陣した昭和世代が担う老人文化が心もとない、それが平成という世の中だ。江戸400年には中核に豊かな「隠居文化」が存在していたという。

平成が逸した老人たちの知恵が試される時代を期待したい。たぶんその頃はわれわれは

消えていると思うが。

賀春

山路孝子

年末年始を塩原温泉の旅館で過（こ）しました。と申しても、実家なのですが。おかげ様で、朝から晩まで、テレビを視、ラジオを聴くことが出来ました。

NHKスペシャル「フライングトアース」に感動。「和菓千年の旅」老舗の資料に目を瞠る。「香川照之の昆虫はずいぜい！」役者も凄いです。歌舞伎の「中車さん」も凄いです。「移住50年目の乗船名簿」これは「凄」の上を行く。

そして「まんぶく」一週間、丁度、進駐軍の命令とか、財務局の税徴収に苦しめられている場面でした。進駐軍が、これ程までに？

ラジオ深夜便で紹介していた、自身自身の体験が甦りました。それは、昭和21年8月に、「私の学校たより」を放送した時のこと、国民学校5年生でした。前日に、大変な交通事情の中、塩原から上京し、当日放送会館に到着すると、まるで初めての原稿

（放送局員が書いた）を渡されたのです。練習を重ねた自分の原稿は、検閲でダメが出たとのこと、多分、傷痍軍人の慰問の箇所だったのでしよう。

そうか、「そうだったのか、日本は独立国ではなかつたのだ。そして、今はどうなのか？」

沖繩のこと。武器爆買のこと、etc。

正月休みの締め括りは、この現実には立ち向かう覚悟を新たにしたことでした。嗚呼！

謹賀新年

山田尚

穏やかな新年をお迎えのことと存じます。50余年ぶりの「時刻表」を手に「青春18きつぷ」を体験しました。普段行き来する新幹線と違い、在来線は何度も乗り継ぎ、時間も数倍かかります。が、途中下車や乗り降りする乗客や窓外の新鮮な風景などがよい刺激になり、長旅も逆に楽しめました。また、乗降は運転席横の扉のみというようなローカル線にも挑戦。そこにあつたのは地図では知らない沿線の今の姿でした。

速すぎないからこそ、駅に停まるからこそ、見えてくるものがあつたようです。

どうぞ本年が良い年でありますように。

眠る宝

吉田賢策

昨年5月平成もあと1年と迫つた頃から、テレビで回顧ものが始まった。さて、自分に何ができるか：番組を本作る立場にないし、こうなつたら本を作ろうと心に決めた。OAならぬゴールは平成最後の新春である。ささやかな自分のテレビの旅路を纏め、文にしていく。暑さも全く気にならず実に楽しい作業である。10月頭には原稿を書き上げ、校正を

経てほんの僅かな部数だが初めての「自分の本」が12月中旬には出来上がった。

千代田放送会館の近くの（出版社でもある）印刷会社の方から、本造りの基礎から校正の仕方まで教えていただいた。本が仕上がった後は、お世話になった人に一言書いて発送作業。その時点でもう少し表現に工夫をすれば、という箇所もあったが、ナマ本番後の様に後戻りが効かないのもいい。保存用に残す部数を考えると後わずか。それを迷惑だったろうが、新年事務所開きに来た会のメンバーに読んでいただくことにして作業は終わった。

実はここからが本題なのだが、この過程のなかで、今まで「これは画にならない」「視聴率がとれない」など軽率な判断をして取り上げなかった宝が出てきた。自分が見過してきた二、三の金の素材は、将来「書く手段」によって光輝かすことが出来るだろう。小説や記録など内容によって表現は変わっていいし、稚拙な文でも心をこめて書けばその本質は伝えられるかもしれない。さらには他の放送人の手で映像化できるかも。夢は膨らむ。

1989年1月8日、平成が始まった日、私は

渡辺純史

私は平成元年始まりの日、1989年1月8日のことを思い出すことがある。当時、私は昭和64年度放送（4月）NHK連続テレビ小説を制作中であった。男女雇用均等法が

施行され、女性の新しい時代が出現するといふ予感の中で、団塊世代の夫婦とその家族（いしだあゆみ、橋爪功、清水美砂、稲垣吾郎）が、現代という荒波をどう航海していくのか、母と娘のダブルヒロインを現在進行形で描くドラマである。新しい時代の新しい生き方をドキドキするような新鮮な感覚で描こうと、タイトルを「青春家族」とした。新年早々の撮影を予定していたが、昭和天皇の病状が重篤となり、NHK内の極秘プロジェクトに私のチームからも数名が派遣され、制作現場は正月休み返上で作業を続けていた。そんな中、明けて7日、昭和天皇が崩御されたのである。

平成となった翌8日、その日は日曜であった。出局して真つ先をやったことは、人影のまばらなドラマ部で、購入したばかりのワープロを使い、すでに出来上がっていた広報用資料を訂正することである。記載されたテレビ小説「昭和64年」を「平成元年」と書き直し、さらに「最初の」という形容詞を付け足した。「昭和64年度連続テレビ小説」が「平成元年最初の連続テレビ小説」となったのである。余談だが、私がワープロを使ったのは30年前のこの日が初めて、ちなみに原企画書は手書きで書いた。

この日の気分は、象徴天皇として私の人生45年間（当時）と共に存在した昭和天皇への哀悼とは全く別の、期せずしての（してやったり）の気分であったに違いない。この時、「平成という新しい包装紙」を得て、キャッ

チコピーとして考えていた「新鮮でドキドキするよう家族の青春物語」にふさわしいテレビ小説ができるかと確信したのである。今考えると、いかに傲慢で鼻持ちならぬ自分自身であきれるが、ドラマ制作という創造の現場の若い活力とはこんなものだったのだろう。

また余談である。実は1989年1月8日は、私にとつてもう一つの意味を持っている。それは、結果としてこの平成元年最初のテレビ小説が私のドラマ人生の「終わりの始まり」になっているからである。「青春家族」は作家の病気もあり、収録の遅れを生じたりもしたが、放送されると、この時の確信通り高い評価をいただいた。しかし、放送終了時、私は東京ドラマ部ではなく札幌にいた。札幌放送局放送部副部長制作統括という職位である。「芸能ドラマ系人事枠を確保するために、あなた以外の適任はいないのでぜひ受けてくれ」といながら、否応のない命令であった。この年、ベルリンの壁が崩壊したことも、日本の株価が最高値に達し、やがてバブルが崩壊したことも、札幌で知ることになる。

いずれにしても、このドラマが私の最後の現場となった。以来平成の30年間（NHKではそのうち20年間）、いくつかのドラマの制作に統括的な立場で参加した例はあったが、実際のドラマ現場には立っていない。というより、放送制作の現場から少しずつ離れ、放送の組織・経営管理の課題に取り組んできた。フリーとなった今なお、名刺にプロデューサー

を名乗りながら、私一人個人で創造することはできず、いくつかの組織に依存しながらいくつかの事業の企画をしているのが現状である。

今改めて、私の75年の人生を顧みると、少々忸怩たる気分でもある。私が生きた昭和の45年間は、モノを創ってきた。平成の30年間はモノを創ることから、組織の歯車となり、駒となり、モノを運び、転がしてきた時代であったように思う。

平成の最初の日、1989年1月8日、私は、私のドラマ制作が永遠に続くような気分が高揚していた。しかしその高揚感は、すぐに消失することとなった。世に憚って90まで生きるとして、次の世は平成時代の半分の15年。さて、私の終わりの始まりであるその2019年5月1日、私はどんな景色を見ることになるのだろうか。冗談めくが、新しい年号に「創」の字が使われ、その年号に励まされ、再び私にモノを創ることが出来るか、そんなことを密かに夢想している。

放送人グランプリ下馬評座談会

—恒例、グランプリ下馬評座談会をお届けします。放送人グランプリのノミネート用紙（投票用紙）はメールでも送られ、同封されています。書くための参考になさってください。今回の投票締め切りは3月16日です。文の頭にA、B、C、D、とあるのは段落記号のようなもので、特定の発言者を示すものではありません。—

【総論】

A まず総論からいきましょう。

世界の状況を見ると騒然、混乱、次の大戦に向かいそうな危惧を持つ。先日、テレビを見てみると「明治は起承転結の起、大正が承、昭和が転、平成が結、となるはずだが、平成は昭和を引きずって、結に至らず、混乱のまま終わろうとしている」と論じていた。

B 戦争関連番組はもう終わった感で、

「フロンハン」の詳しい状況分析は出たが、やはりこれまでのものの拾遺だ。それより浮浪児の問題など戦後の問題が拾われていた。NHKではそれらは報道ではなく教養あるいは生活・文化番組として作られていた。

C この1年のトピックスとして4K、8Kがあり、技術的な進歩で当然到着するステージだと思いが、かつてハイビジョンが登場したときのインパクトはない。ハイビジョンは画面のサイズと衛星からのデータを放送にして行くための電波の仕組みの制度化に大きな影響があった。4K・8Kにはそんな制度的な、産業的な影響はない。しかしデータ量は

大きいから、パブリックビューイングなどオンラインピックに向けて新しい視聴形態が生まれる可能性はある。

D 制度の問題では、放送法4条の問題がある。いまのところ凍結状態というか、立ち消え状態だが、いまのような政権が続けば常に出てくる問題だ。ちゃんとウォッチしているか、放送局側はちゃんと理論武装しているか、どうも頼りない。

A 地上波を含めたデジタル化のときは産業的にどうなるか、放送法を含めた制度構造がどうなるかについてNHKも民放も真剣に理論武装した。そんな緊張感がいまいないように思う。放送人の会はこのことに関われないだろうか。

B いま言われたこと以外で気になるのはAIとビッグデータだ。これが放送にいろんな形で入ってきている。災害の時どう逃げるか、など最初はビッグデータの単純な利用が多かったが、だんだん使い方が多様になり、世の中でAIとビッグデータがどう使われているかに目が行くようになった。どこに問題

点があるかはまた言える段階ではない。

C NHKの技研が字幕放送、顔写真の認証など優れた開発をしている。

D ハイビジョンのときはダウンコンバートの問題があったが、4K、8Kではより一層ビッグデータの扱いや新しい技術開発の扱いに注目しておく必要がある。

A 大きな動きでは国際的な通信系の動きが気になる。映画ではカンヌ映画祭が通信系のコンテンツは出品を認めないとの方針を出したのだが、ベネチア映画祭で金獅子賞をとった「ローマ」という作品は最初からアメリカの通信系（Netflix）で流された。

昨年の中韓テレビ制作者フォーラム光州大会の前に開かれたアジア・ドラマ・カンファレンスに行ったが、中国作品の多くは最初ネットで流される。そのあとで地上波、あるいは衛星のテレビに持ってゆく。ネットでの反応がテレビの放送権利にリンクすると言っていた。通信と放送の関係は日本よりはるか先へ行っている。中国でのドラマの制作本数は物凄い。韓国でも事情は同様で通信系は無視できない。

日本ではどうかというと、一つはNHKの常時再送信の問題がある。これは放送法改正の問題でもある。もう一つには、Netflix、iixやHULUはお金を持っているので有名な脚本家、俳優を使ってドラマを作る。これは世界的な潮流で日本はもはや無縁ではいられない。

B NHKは受信料を値下げしたが、これは永田町、霞が関の圧力に屈したようだ。NHKは単年度赤字だという。貯金を取り崩すそうだが、普通の企業の経営で赤字を承知で商品を値下げすることはあり得ないだろう。

C その代わりすべての受信機から受信料を徴収できる布石を打った。最高裁の判決では受信料制度は合法だ。問題はワンセグも受信機だと認めるかどうかだが、一昨年の最高裁判決はそのことに触れていない。高裁レベルでいま争われていて、勝ったり負けたり、ワンセグは受信機であるとの判決が多いが、いずれ最高裁の判断が出てくるだろう。

D NHKとしてはワンセグであろうと、パソコンであろうとNHKの放送を見たら受信料をいたたく方針だ。公共放送でなく公共メディアと言っているのはそのためだ。

A 平成はデジタル情報化の時代とされ、ここ10年、通信が勝つか放送が勝つかと言われ続けた。電通の調査によると昨年の世界の広告費は通信系がトップで38・5%、テレビは34・5%、今年中に通信系が40%を超えるという予測されている。つまり通信が勝ったわけだ。

B こうなると視聴者は裸にされる。メディアによって常に監視される。パソコンで買物をするとそのデータはすべて集められる。中国では顔認証が完璧にできていて、映像を見ると個人の犯罪歴と顔が瞬時にわかり逮捕に結びつく。国民だけが監視され、国が持つ

ている情報、データは隠蔽される。その構図がはつきりしてきた。これからの放送の仕組みを考えなくてはいけないと思つた1年だった。

C ドラマについて全般的な話をする、1時間ドラマの連ドラの主役が高齢化している。50代、60代、「相棒」のコンビはあれだけ長年やって何歳になつていだろう？ そのため若い世代は誰も見なくなる。若い人が見ているのは30分ドラマだ。30分ドラマの異常繁殖が昨年から今年の特徴で、深夜の時間帯で週に10数本出ている。これらのドラマの制作条件は良くない。多くは一つのシーン、チュエーション、たまにロケがあつても遊園地の中を駆け回る程度。絶望的だ。普通の地上波では青春ドラマはもう見ることができなくて、見よと思つと深夜の2時から3時の時間帯のドラマを録画して見る。キー局のドラマ担当者には、「若い人をキヤスティングしろ。視聴率がダメでもそれで打つて出る」と恫喝したい。このままではドラマの将来は非常に危ない。

D 日本のテレビは成熟しててまだ大丈夫でしようと言つていたのは10年前くらいかな。そろそろ危ないことがはつきりしてきて、技術的にもビジネス的にも、テレビがファーストウインドウであり続けることができるかがいまは問題だ。

A フェイクニュース、情報責任の問題をどう考えるか。テレビは最も信頼できるメディア

アであり続けることができるのか。そんな観点で下馬評をやりたい。

B BSはほとんど再放送だが、下馬評の対象にしていいのだろうか？

C テレビ東京ががんばつて新作をやっている。出来不出来はあるが…

D 若者は4K、8Kを全く相手にしていない。テレビを持つてなくて、学生は「先生、6インチでいいんですよ」と小さな画面で見ている。通信、ネットの方へは関心を示す。

A メーカーも醒めている。

B 放送の制作現場も醒めている。ハイビジョンが出たときの制作現場は太道具、小道具、化粧、床山がどこまで写るかわからないからと物凄い研究をして、作り物だと絶対バれないようなものを作ろうとしたし、局をあげてのイベントとして番組を作つた。あの熱意がない。4Kのスタートのときの民放の番組はシベリア鉄道をヨーロッパまで延々旅して行くというものだった。これは現場が全くやる気がないということだ。画が良くなったということだけでは人は動かないのだから。

C ハイビジョンのときもそうだったが、医学的な問題など画の精密さが大いに意味があることはある。

D ハイビジョンのとき、民放はどうしたらNHKに勝てるか、けたぐりでも出足払いでもいいから何とかならないかと凄いい熱気だった。

A それからデジタルがあり、高精細度の画

面はもう当たり前になつてしまった。しかし、忘れてならないのは韓国、中国で、NHKが開発した8Kの番組を見るとディスプレイ画面が日本になく、韓国のサムスンが作ったディスプレイで公開した。それほど日本のエレクトロニクスの力は落ちてきている。

B 中国では8Kのパブリックビューイングが広まつていてあちこちで見られる。それは放送でなく、通信で送られている。放送より、通信の方が簡単なのだ。放送では電波の帯域をいじったり面倒だが、光通信は問題がない。4K、8Kの運用はしばらく韓国、中国が先行する。

【ドラマ】

A そろそろ一般論を打ち切つて個別の番組の話にしましょうか。まずはドラマから。

B 先ほどドラマの主役がおじさんばかりだと発言があつたが、おじさんが主役の「おっさんずラブ」(テレビ朝・土曜・23・15)から行きたい。話題になつたということではこれが一番ではないか。社会現象といつていい。見逃し視聴率が121万回と凄い。録画したのも視聴率にカウントされ、営業に使われる新しい流れが生まれている。

C 男が男を愛することはかつてはタブーだったがいまは普通のことになつてしまった。PにTBSの貴島誠一郎の娘である貴島彩理がいる。

D ドラマにオリジナルがなくなった。マンガ原作、小説原作、特にマンガ原作が多い。

じっくり撮つた映像でなくバラバラ漫画の世界的印象だ。そんな中で「科捜研の女」(テレビ朝・木)や「相棒」(テレビ朝・水)など、東映テレビ制作部が作つているドラマがコンテンツに12〜13%の数字をとっている。

A 海外のヒット作をそのままやっていたのが織田裕二主演の「スーツ」(フジ・月・21)と常盤貴子主演の「グッドワイフ」(TBS・日・21)だ。どちらも日本風にアレンジすることがあまりなく、そのまんまやつている。原作と見比べると不満。

B 「グッドドクター」(フジ・木・22)はもと韓流ドラマで、2017年アメリカでリメイクされ、2018年日本でリメイクされた。

C 朝ドラの「半分青い」をあげておきたい。朝ドラの定例的なパターンを破つた「あまちゃん」以来の名作だと思う。脚本の北川悦吏子のこめられた力を感じた。

D 「いつまでも白い羽根」(東海テレビ・土・11・40)はフジテレビ「オトナの土ドラ」枠の放送で、気にして見ていた。その枠での6月からの放送が「限界団地」。佐野史郎の怪演が話題になつたピカレスクロマンで面白かつた。この枠は50分で、回数も7回とか8回とか一定していないし、原作ものもオリジナルもある。企画が横田誠。この横田チームを応援したい。

A 「限界団地」のストーリーを読むと「あやめ町団地にやってきた最強の老人。昔暮ら

した団地でダンチマンを名乗り、住人を仕切
って反抗するものを抹殺、息子夫婦を殺して
放火、保険金を偽造：」とある。

B 面白く見たが後味が悪い。しかし、団地
にはいまいろんな問題がある。空き家が増え
た、外国人が住み始めた、高齢化、孤独死、
などなどブラックなのだ。

C このドラマはブラックでいい、後味が悪
くていい、と聞き直って作っている。そんな
冒険はいいのではないか。

D 「いつでも白い羽根」は藤岡陽子の小説
が原作。大学受験に失敗して看護学校に入學
した学生の卒業までの青春ドラマなのだが、
いじめあり、不倫あり、昼メロのドロドロ系
そのままだ。

A 脚本家の観点からみると女流が頑張った
1年だった。まず井上由美子。昨年1月放送
だが木村拓哉主演の「BG」を書いた。キム
タクはレーサー、パイロット、総理大臣など
いろんな職業をやってきたが、ボディーガー
ドはやったことがなかった。1話完結でかな
り数字をとった。

テレ東の月曜10時が「ドラマBiz」と
いう経済ドラマの枠になり、その3作目が
「ハラスメントゲーム」でこの脚本も井上由
美子。彼女は時流に非常に敏感で、ハラスメ
ントについても彼女ならではの切り方があ
る。

さらにWOWWで「バンドラIV:AI戦
争」。主人公の向井理が医療用のAIを開発

し、人工知能というバンドラがなにをもち
すかを描く社会派ドラマ。「バンドラ」は2
008年から続くシリーズでPはフジの河毛

俊作。AI戦争が4作目だ。これまで、ガン
の特効薬、遺伝子組み換え、クローン人間
そしてAIだから、井上由美子の近未来を題
材に取り込んでの仕事は凄い。彼女は医療に
も法曹界にも政界にも詳しい。

NHKでは真木よう子主演の「炎上弁護
人」(12月15日夜9時)。これは単発。つ
まり1年で連ドラ3本と単発1本、それもか
なり質の高いものを書いてる。

B 野木亜紀子も注目だ。「アンナチヨル」
(TBS・金・昨年度「黙になれないわた
したち」(日テレ・水・10時)「フェイクニ
ユース」(NHK土曜ドラマ・10月20日、
27日の2回放送)など。「逃げ恥」:「重版
出来」など原作ものを書いていたのが、満を
持っていたかのようにオリジナルを書きまし
た。

C 大石静も注目だろう。TBSの「大恋
愛」(金曜・10時)だ。民放の恋愛ドラマは
過剰と過少を繰り返してきたが、いま激減す
る中であえて「大恋愛」というタイトルをよ
くぞつけた。若年性アルツハイマーの戸田恵
梨香とムロツヨシの二人の10年の物語だ。
大石静には反時代的というか、時代に逆行す
るところがあるが、「家を売るオンナ」の続

編「家売るオンナの逆襲」(日テレ・水・10
時)は痛快で、大石静らしい毒がふんだんに

ある。北川景子の新しいキャラクターがで
きた。

D この女性3人に匹敵する男性脚本家は見
当たらない。女が元気だった1年だ。

A 池端俊策は大河ドラマの準備。劇場で、
民芸の芝居をテレビドラマを書き直してやっ
ている。

B 坂元裕二が日テレで「あのね」(水・10
時)を書いた。「マザー」「ウーマン」に次ぐ
3作目だが、「マザー」「ウーマン」はトルコ
でリメイクされ大ヒット。トルコのテレビ・
コンテンツは中東、北アフリカ、バルカン半
島、中央アジアと広い販路を持ち、「マザー
はすでに20か国に売れた。国際テレビ番組
見本市MIPCOMで外国人が選ぶグランプリ
でグランプリを獲得した。

C 古沢良太はフジテレビテレビの月曜9時
の「コンフィデンスマンJP」を書いている。
長澤まさみ主演の詐欺師のドラマで、JPと
いうのは日本、韓国に「コンフィデンスマン
KR」中国に「コンフィデンスマンCN」が
あり、それぞれの国の俳優を使って制作され
ている。

D 脚本家の他に女優さんもあげておくと綾
瀬はるかが元気だ。今年度は「義母と娘のブ
ルース」(TBS・火・10時)で元気なキヤ
ラクターを好演した。いま、NHK大河ドラ
マの「いだてん」に入っている。

A 「科捜研の女」の沢口靖子も頑張ってい
る。あれは連ドラの現代もので最長記録だ。



鈴木嘉一氏



菅野高至氏



隈部紀生氏

NHKBS時代劇「子吉の女房」で勝海舟の
女房のお信をやっている。

B お信はよかったが、古田新の子吉はどう
かなあ。若い夫婦の勢いが欲しいのに役者は

高齢化している。若手を起用して新しいことをやろうと思ってもキャスティングはジャーナリズムなど事務所の言いなりだ。役者をテレビは育てていない。

C これまで冒険的なキャスティングをしてきたNHKのテレビ小説が「まんぷく」以降3作は既成の女優さんを主役にするようになった。安定した数字が欲しいのだろうか。
D NHKBの土曜時代劇「そろばん侍風の市兵衛」を楽しくみていたのだが、あつという間に終わった。

A 原作は辻堂魁で、文庫本の書下ろし。何冊もあつてまだドラマが作れるはずだと思いが、続けるのが難しいパターンなのかもしれない。

B 「西郷どん」がやっと終わって「いだてん」に期待しているのだが、どうだろう。

C ビートたけしの志ん生は疑問。

D 「西郷どん」は明治維新150年をあてこんでやったのだが、政府主催の明治150年のイベントも全く盛り上がらない。逆に福島民友新聞は「戊辰150年」を連載して注目された。東北では明治150年ではなく、戊辰150年なのだ。明治150年が盛り上がりなくて「西郷どん」も盛り上がりなかったのだが何故なのだろう。

A 大河ドラマの企画には過去何度も西郷隆盛はあがつて消えた。最後に悲劇的なこともあるが、主役の人物像として難しいところがある。戊辰戦争以降を掘って行くと彼は悪役

にならざるを得ない。鹿児島からは何度もやつてくれと陳情が来たが取り上げなかった。今回、やはりその難点が出ている。これまで何故やらなかったか、1年やつて実証された。スタッフは随分努力したと思う。

B 島流しはきめ細かくやつていたが：

A 逆に言うと、あそこにはしかドラマがない。島では最も人間らしい暮らしをしたのだが、歴史に一番遠い暮らしだった。

B ちよつと前までは明治維新は旧体制を壊して新しい世の中を生んだ革新だと認識されていたが、最近、江戸時代は平和な戦争をしない時代で、明治維新で富国強兵、戦争をする国に変わったと認識が変わり、明治維新賛美は古い手垢のついたものになった。

C 大河ドラマにはこれまで必ずブレイクする俳優が出ていた。中村半次郎をやつた大野拓郎などブレイクしていいポジションにあつてそうならない。

D TBSの池井戸潤原作のドラマをやつている福沢チームのキャスティングは一味違う。「下町ロケット」では尾上菊之助、古舘伊知郎、昨年「陸王」では阿川佐和子を引っ張り出してきて工場のおばちゃんをやらせた。落語家の立川談春とか、俳優業でないところから起用している。これはかつて大河ドラマがよくやつていて、歌手、スポーツ選手などを使った。異種格闘技をやつて、どういう味になるか楽しめた。

A 大河は器が大きくて、異種格闘技をやれ

るのが売らだった。いまは間口が狭くなったのかも。売れない。

B 渡辺謙がやつた島津斉彬はもともと悪役っぽいのだが、西郷の恩師として、極めてヒーロー的に登場する。あれでついでに行けなくなった。

C 島津久光をやらせればよかった。青木崇高がやつたが、あれが間口の狭さなのか。

D 知らない人が一枚看板で出てくる。えっと思う。役者は大河より朝ドラの方に出たがる。大河は吸収力を失っている。もつと頑張れとエールを送りたい。

A 「いだてん」はわかっているようだが、まだうまくいっていない。主役が金栗四三でよかったのだろうか？

B 「あまちゃん」のとき、官九郎はおもちや箱をひっくり返した面白さがあったが、大河になるとつちらかつていく。いづれ、いろんな話が相互に絡み合つてストーリーを織りなして行くと思うが、どれだけ惹きつけてくれるか楽しみにしよう。

C 当人の弁では、大河のつもりである企画を持っていてはいないと思う。

D 始まるまでの宣伝が凄かった。これがNHKかと思った。朝からすべての番組に大河のネタを仕込んだ。

A これがいまのNHKなのだ。狂つたようにやつた。テニスの全豪オープンも狂つたように宣伝した。

B 一つの作品、番組をあれほど狂つたよう



西村与志木氏



前川英樹氏



藤久ミネ氏



鈴木典之氏

に宣伝するのは何故なのかと思う。「いだてん」の第1回はいろんな宣伝を集めたバラエティになってしまった。

C 「西郷どん」は50回の予定が3回減って47回になった。減った3回は「西郷どんスペシャル」というバラエティが番宣のような番組で埋めた。あれなら総集編をやるべきだ。

D 芸術祭で大賞をとった「透明なゆりかご」(NHK・金・10時)がある。大河や朝ドラにないドラマのクオリティがあった。いろんな医療ドラマはあるが、妊娠、中絶と向き合って深い。

A 基本的には暗いが、珍しくゆったり見られた。

B 主役が清原佳耶。17歳の少女のひとりごちのようなナレーションが魅力的だった。医師の目線ではなく少女の目線で作られている。

C 見習い看護師で17歳。同世代の子が妊娠している。離婚して娘と二人暮らしの母が酒井若菜。先輩看護師、水川あさみ。病院という場はドラマを作りやすいのかもしれないが、それよりホンが良かった。原作は沖田×華のマンガ。脚本は安達奈緒子。そして柴田岳志の演出が良かった。振りかぶったところはないが、非常に丁寧だ。

D 日本に企業ドラマは少ないと思う。「ハゲタカ」「下町ロケット」は面白かったが本数は少ない。企業に配慮してやりにくいのだ

だろうか？

A いや、企業はドラマの背景に必ずある。「おっさんずラブ」でも会社だし、「家売るオンナ」も会社だ。

B NHKの土曜の社会派ドラマと呼ばれるものは企業ものだった。いまちよつと路線が変わっているが、企業イコール社会だから。

C テレ東のドラマは基本的に企業ドラマだ。WOWOWはいまサスペンスとビジネスドラマで頑張っている。

D テレ東が若い人向けに「ドラマ25」で「インベスターZ」をやっている。原作はマンガで高校生たちが部活で投資をする。日本経済を分かり易く描くために、企業のトップが出演していて数分のインタビューがあり、高校生は誰が一番儲かるかを競争する。見て大変勉強になった。

A 社会派、骨太といわれる企業ドラマは、題名とキャスティングをみると中身がだいたいい想像できて、つい敬遠したくなる。

B 企業ドラマはその企業のなかで努力し企業を盛り立てて行くというドラマでなく、セクハラがあり、パワハラがあり、ドロドロの社内恋愛があり、というイメージだろう。それがドラマの舞台として面白い。明るい未来に満ちた、ドラマの舞台としての魅力ある企業なんてそうそうあるものじゃない。

C その代わり職業ものというはある。警察、弁護士、検察、商店：お仕事ドラマというやつだ。

D 遊川和彦脚本の「派遣占い師アタル」

(テレ朝・木・10時)がお仕事ドラマ。遊川氏は今回演出もやっていて独特の面白さだ。

A テレ朝の深夜で「ディレイ」はパディのもの、相棒もので、山田孝之と菅田将暉のコンビが主演。デジタル遺品、パソコンなどに残っているデータを依頼人の生前からの契約で抹消することを請け負う。残されたデータからは依頼人のいろんな人生がみえてくる。脚本・演出はいろんな人を結集している。本多孝好が原案と脚本。金城一紀が脚本とアクション監督。山田孝之に2分半の超絶車椅子アクションをやらせている。依頼人がゲストになるのだが、高橋源一郎が元闘士の40年後、映画監督の塚本晋也など面白いキャストラインだ。

若い人にはもちろん面白いだろうが、高齢者が見ても面白い。現代性があり、アクションを加えた意外性もある。

B ドラマの出来不出来は別として、こんなことがドラマになったのだと思ったのが「フエイクニュース」と「炎上弁護士」。時代を反映したドラマとして評価したい。

C 今年度活躍した女流脚本家二人が同じようにネットの問題に挑んでNHKでやったわけだ。

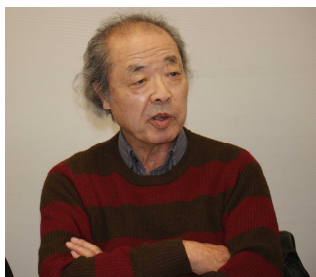
D ドキュメンタリーに近い実録ドラマ「未解決捜査ファイル・警察庁長官相撃事件」(Nスペ・9月2日)は凄く良い出来だった。



三原治氏



吉田賢策氏



渡辺紘史氏

A これはドラマ部分の脚本・監督が黒崎博。

B 実録ドラマはドキュメンタリーと別にする方がいいが、同時並行で放送するのは疑問がある。

C かつてはドラマ部分を外注していたが、今回黒崎は脚本も書いている。

D 小さな作品だが、NHKの地域発ドラマ福岡発「You May Die」がある。

ロックバンド・シーナとロケッツの青春時代で、久々にミュージカルとしてレベルの高い作品だ。地域発ドラマは今年度も何作かあるが、これが最高だろう。

A 『母帰るAの遺言』（NHK・1月5日）が良かった。子どもを使うと現実離れするのだが、あれ、これはあるぞ、と思わせられた。母親が生きた姿を一定期間記憶するとAIによって命を持たせることができる。ケータイに記憶させておくと、事態に応じて答えてくれる。将来、愛する人をずっと失いたくないと思えば生前そのデータを記憶させておけばケータイと共に余生を過ごすことができると。変なことも考えさせる面白いドラマだった。

B AIを扱ったものでは最も説得力があり、感じるどころのあるドラマだ。脚本は三國月々子、山本周五郎人情時代劇を書いて育ったのだぞうだ。

C これも女。男で頑張っているのはいないのか？

D ベテランで野島伸司。「高嶺の花」（日テレ・水・22時）を書いた。もっと話題になるかと思ったが残念だった。

A 男の演出家ではTBSの福沢克雄。今度映画も撮る。

B 最近ではドラマと映画は連動している。テレビ東京では予算の少ない連ドラ、BSと映画の連動を最初から考えている。

【ドキュメンタリー】
C そろそろドキュメンタリーに行きましょう。

A ドキュメンタリー番組ではないが、いま注目しているのはBS-TBS 19時半からの「ニュース1930」。司会松原耕。あの番組に出るとゲストのコメンテーターが真剣になる。いい加減な発言には松原氏が突っ込むから、他の番組にない緊張関係がある。この番組で天皇退位問題を扱った。

平成天皇が象徴天皇とあろうとして30年やってきたことと、いま政府が推し進められている路線は完全に対立している。これから国民はどちらを選ぶか判断することになるが、そのことを取り上げたものがなかった。他局ではもっぱら回顧に終始するが、この番組では、天皇が憲法の規定する象徴天皇であることを守るのにいかに腐心したかを明快に示した。

自民党には11月3日を明治の日にしてしまうとの動きがある。この日は確かにかつての明治節ではあるが、現在の憲法の発布の日でもある。それを無視しての強引な逆コースのやり方だと「ニュース1930」は、控えめに慎重に論じていた。

B よくあの編成を決断したと思うが、決断

に値する内容になってきた。

C ドキュメンタリーに政治批判がなくなつた。Nスペが政治問題を扱っていない。民放の方が問題を扱っている。

D 昨年の芸術祭テレビドキュメンタリー部門は49本が審査対象で、7日間ぶっ通しで見た。大賞はE.T.V特集「静かでにぎやかな世界へ手話で生きる子供たち」（11月29日放送）。これは1時間BGMがない。新鮮だったがスタティクで問題提起に乏しい。

A あれはNNNドキュメントでも、NHKのハートネットTVでもとりあげた。こうした問題ではハートネットTVはがんばっている。

B 地方局のドキュメンタリーがいい。メーレドキュメント「行ってみれば戦場へ暮らしたミサイル攻撃」は昨年大賞を受賞した

「防衛フェリーと民間船と戦争」の続編で優秀賞受賞。2年連続受賞だ。もうひとつ北陸朝日放送の「言わねばならないことと防空演習を唾った男」。これは「関東防空大演習を唾つ」と題するコラムで筆禍事件を起こした桐生悠々の生涯で、長いが力強い作品だった。

C いまの時代に桐生悠々に注目するのは凄

D NHKは戦争直後についてのNスペが多い。「馬の子の闘い」語り始めた戦争孤児（8月12日放送）。「隠された日本兵のトラウマ〜陸軍病院80002人の病床日記」

（BSスペシャル・11月26日放送）「隠された」は中国戦線の異常な状況下で日本兵がいかに狂ったかを描いている。

A 椿プロの金本麻理子の作品だ。アメリカではベトナム戦争以降戦場でおかしくなった兵士を全部隔離したが、同じことを日本がやっていた。日本に呼び戻して誰にも知られないよう隔離している。あの人たちは戦後補償も何もされていない。どこで亡くなったかも知られない。靖国神社へもまつられない。

B 戦争の激戦地の記録の継承は昨年度が山だったが、戦後どんな問題があったか解決されないまま残っているものは多い。これが戦争の継承のメインになってくるだろう。

C いや私はNNNドキュメントの「南京事件II〜歴史修正を検証せよ」（5月13日放送）に注目した。これは想定される批判、反論に対する反証を「きっちりやっている」。

D パート1も表彰されている。NNNが執念をもつて続けているのは称賛に値する。

A 同じようにメーレが自衛隊を取材することで見えてきた問題がある。Pが村瀬史

憲 Dが依田恵美子のコンビで作りに続けている。自衛隊から見えてくる戦争と日本、庶民は戦争にどう向きまされて行くのか、意識をどう変えられているのか、そこに着目して継続取材していることを評価したい。

B 3本作って2本、賞を貰っている。

C MBSの沢田隆三、斎加尚代のコンビも

ある。昨年度「教育と愛国」でギヤラクシー賞の大賞をとったが、最近「バッシングとその発信源の背後に何が」(12月16日放送)を作った。いろんなバッシングを調べてみると超保守とネット右翼と運動している。それを検証した番組で、放送するとわかった途端、斎加さん、沢田さんはネットの凄いバッシングにさらされた。そのことを番組の最後に入れて放送した。

D 東海テレビの「さよならテレビ」(9月2日放送)は近く東大で上映会をやる。このPの阿武野氏はグランプリをとっているからもういいだろう。一緒にずっとやってきた斉藤潤一が「HOME」間サイト事件・娘の贈り物(12月25日放送19時)と題するドキュメンタリードラマを作った。斉藤由貴が殺されたお母さんを演じ、犯人の側と被害者の側を等分にながしている。これが、斉藤潤一が報道部長をやめて最初の仕事だ。

「眠る村」の第3章が2月からポレポレ東中野で公開される。昨年菊池寛賞を受賞した東海テレビドキュメンタリー劇場の11作目だ。

A 「さよならテレビ」の評価はどうだろう。
B 完全に賛否両論。真二つに別れている。話題だったね。東海テレビの一連の作品は局内で賛否が別れるものこそでないものがあり、今回別れる方の土方宏史が撮った。

C 彼が2年前撮った「ホームレス理事長」

もわけがわからなかった。

D 裁判所 ヤクザ、テレビ局、お邪魔したところは聖域とかタブーとかだ。それをこちらに向けて同じことだ、と土方は作っている。局的には大変なことで、彼は孤立無援。しかし、問題作と意欲作はメダルの裏表だ。

A 最後は辞めて行く契約社員に期待する形で終わる。あれを正規採用の局の社員、報道部員はどう考えているのか出てこない。それで「さよならテレビ」って何なのだろう。

B 自分のところの報道のありようを描くのだから、本当はドラマで作った方がうまく行くだろう。しかし自分たちのざわついた部分を開局記念に乗じて放送しちゃうのは見上げたものだ。危ない企画を採用した放送局の勝ちだと思っ。

C 前からこの番組のことは知っていたのですぐDVDを送ってもらった。すると見たいという人が続々。一人は大阪のドラマの女性中堅ディレクター。密かに見られる裏ビデオみたいだ。

D 「さよならテレビ」と言われると誰だっ て関心を持つ。制作関係者ならなおさらだ。
A ETV特集「佐藤さんとサンくん」難民と歩むあかつきの村(11月3日放送)は衝撃的だった。サンくんはベトナム難民、ポート・ピープルで、子どもの時日本へ来た。ところが発達障害で寝たきりだ。ベトナム難民は一時あかつき村に住んでいたが、

その佐藤明子さんがサンくんを献身的に介護し、歩けなかったサンくんを少し歩けるようにした。ベトナムへちよつと帰ったが子どもどきベトナムを離れたので両親や親族は会おうともしない。それで日本へ帰ってくる。そんな話を克明に追っている。あかつき村は群馬県にあり、キリスト教の牧師が作った施設がいま社会福祉法人の施設になっている。

いま外国人労働者受け入れについて法整備が行われているが、外国人受け入れはそんなに簡単なものじゃないと、共生の問題を教えられる番組だった。

B 取材者の眼を通して、彼の感想だけでまとめられていて、詳しいことはわからないが不思議な印象だった。サンくんは幸せに死んだようだが、残った佐藤さんはこれからどうするのだろう。

C 自分を犠牲にして介護した人生がここにあったのだ。負ぶったり、車の中で添寝したりの映像があるが、取材者はコメントしない。見て、印象深い、どう受け止めればいいのか戸惑っている。

D 「駅の子」の闘い」はそんな境遇にあわなかった人はあそびだったのか、ですむかもしれないが、「日本兵のトラウマ」は戦争に行ったら必ずそんな場に立たされる。憲法9条が危ういまま、評価して欲しい作品だ。

A BS世界のドキュメンタリーで「アフタ

ーヒトラー」(1月24日)前後編をやっている。ヨーロッパの戦後の荒廃と混乱の映像だ。ただ映像を見て衝撃的だ。

B 沖縄のものではETV特集に「基地で働き基地で闘う」沖縄・上原康助の苦悩(6月23日、12月22日放送)がある。

C 今年度、戦争関連番組が少ないというが、ETV特集ではこの他に「ノモンハン責任なき戦い」(8月16日放送)をやった。「海軍400時間の証言」のような舟な作り方だ。今年NSべよりE特の方が頑張っている感じで、多岐に渡って作られている。

D E特は視野が広く継続的にやっていると思う。「私は産みだかたつ旧優生保護法の下で」(7月21日放送)「わが不知火はひかり風(なぎ)石牟礼道子の遺言」(5月5日放送)にそれを感じた。

A 水俣では「写真は小さな声である」ユージン・スミス水俣」(ETV特集・11月10日放送)が本当に悲しい番組だった。ミスは写真集「水俣」があるが、いつも被害者の悲しみを考えている写真家だった。

B 昨年、恵比寿の東京都写真美術館でユージン・スミス写真展を2回やっていった。

C 「クローズアップ現代」はこれまでも報道と報道制作で作っていたが、形が変わり、NHKのディレクターたちの力は発表の場をETV特集に求めているようだ。

D NSべは人体、宇宙、東京秘島探検など非政治的なテーマのミニシリーズが多くなっ

た。政治に背を向け風俗に手を広げている。

A 相田洋が「移住 50年目の乗船名簿 第1回アマゾンに生きた人々」(12月29日放送)

「大河ドキュメンタリー」ともいべき作品で、移民の人たちの50年間に及ぶ紆余曲折を10年ごとに現地へ行って取材してまとめた。4回放送される。

B 今回取材すると、取材相手が「カメラマンが違う」と言う。カメラマンは「前来たカメラマンが病気で私代わりに来ています」と弁解していた。この番組には歴史がある。

C 相田洋は母親と思いの満州を撮っているが、この執念は凄かった。「移住」も10年毎に取材して今回が総集編。この執念も凄く成功した人、失敗した人、日本へ帰ってきて成功した人、いろんな人生がある。

D これは4K、8Kで撮っている。その一部がでたが、これから本格的に編集して出すぞうだ。

A BS1スぺシャル「欲望の資本主義2019〜偽りの資本主義を越えて〜」(NHK・BS1月15日22日放送)

が面白かった。2017、2018そして今回と続けてきている。

B 「在宅死 死に際の医療 2000日の記録」(6月10日放送)もBS1スぺシャル。

「どんなボロ家でも家で死にたい」。死に臨む人々の様々な姿と介護をみつめる。100歳を越えた老婆は介護施設に入りながらも癌を病む中年の娘を老いた母親が家で看

取る姿。中でも、全盲の娘が肺がん末期の父親に付き添い食事を含め在宅看病する姿が胸を打つ。庭先の百日柿の色づきに季節の移ろいを感じる父と医師との会話。父の臨終に「お父さん」と呼ぶ娘の澄み切った声の響き。森鷗外の孫の在宅医師の目を通して人間の臨終の姿を静かに見つめる。己は最後をどう生きるべきか。取材はカメラを回す女性、ディレクター下村幸子ひとり。

C テレメンタリー「見返りのまち〜極大化する岩国米軍軍事基地」(朝日放送・7月7日放送) 米軍基地の増強を急速に凶る岩国市。その見返りは日本政府からの多額の資金援助。小学生の給食費、医療費無料、タブレットなどの備品充実、野球場などの新設。金のばらまきが軍事施設の拡大を市民に容認させてきた。米軍軍属4千人の増強に市内の飲食店もタクシー業者も積極的にウエルカムだ。しかし、厚木から空母艦載機をすべて受け入れ、沖縄の嘉手納を上回る空軍基地になり、オスプレイも飛来し、戦闘機の深夜訓練も始まると、市民からも騒音の被害苦情が沢山寄せられるようになる。事故が発生したらどうなるのか。沖縄県以外の在日米軍基地が投げかける問題を柔軟な視点で検証し続ける。

D 昨年は災害の多い年で、西の地方の局が3局、テレメンタリーで「検証・西日本豪雨」(9月2日・22日放送)をやった。広島ホームテレビは広島市安芸区の防犯カメラの

映像を使って「道は濁流になった」、愛媛朝日テレビは西予市野村町の肘川の氾濫を追って「ダムに沈められた町」、九州朝日放送は倉敷市真備町の災害と福岡県朝倉市の災害を追って「自治体の悲鳴」を作っている。災害が多発しているのだから、各局が取材エリアを分担し、メディアの取材が集中して災害地に迷惑をかけることのないような配慮は必要かもしれない。

【スポーツ】
A スポーツドキュメンタリーの分野かと思うが「ロストフの14秒 日本vsベルギー 知られざる物語」(Nスペ・12月8日放送)。ワールドカップ世界大会で日本は最後に点を取られてベルギーに負ける。この最後の14秒に何が起こったのか。どうして起こったのか、何を考えたかを日本・ベルギー双方の選手、ベンチに綿密に取材した。山際淳司の「江夏の21球」をテレビでやろうとしていた。この時間帯、何にもしなければ引き分けになる時間帯だった。しかし勝てるチャンスがあれば点を取りに行くのがスポーツだ。日本は果敢にゴールを狙い、失敗し、超高速のカウンター攻撃で1点を失うのである。ロス

トフはこの試合の競技場の名前。それをフオローする「激白!西野朗×岡田武史vsサムライブルーの未来」(BS1・1月2日放送)の対談番組があり、「あそこは攻めるしかなかった」と西野・岡田の意見は一致した。この二つの番組はサッカーゲー

ムの奥深さをしみじみ感じさせる面白い作品だった。

B 「球辞苑vsプロ野球が100倍楽しくなるキーワードたち」(BS1・毎週土曜)が面白い。盗塁、リードなどいろんなキーワードについて徹底的にプロの業の蘊蓄を教えしてくれる。こだわりの角度がいい。

C 「大リーガーNOMOVSドルネード “日米の衝撃”」(Nスペ・10月21日放送)も面白かった。

D 「スポーツ酒場 語り亭」(BS1・不定期)は、ミッツ・マングローブがママの酒場に常連客数人が集まり、スポーツを語る。先日はフィギュアについて語りたいたゲストが集まり紀平梨花を語っていた。

【バラエティー】
A 「平成方葉集」(BSプレミアム・1月2日放送)は天皇、農氏、タクシードライバー、引きこもりの歌人などなど、いろんな人が平成に詠んだ短歌を単純に並べている。パッパは生の映像を加工せずに、震災に風景など普通に出てくる。生田斗真と吉岡里帆が朗読。これは平成の日本人の記録だと思っ

た。テレコムスタッフの作品。
B 「激レアさんを連れてきた」(テレビ朝・月・23時)はテレビ朝の弘中綾香アナと若林正恭が激レア体験者を扱う。激レアとは、例えば新幹線の売り子のねえちゃんや元ヤンキーでいま頑張ってる30万円くらい稼ぐといったもの。二人のトークはフリップを使った漫

た。二人のトークはフリップを使った漫

談風だが新鮮で視聴率も高い。

C 『ぼんちと一軒家』(ABC・日曜・8時)

時は昔にもあったような感じだが、宇宙からGPSで探すとぼんちと一軒家がある、ここに行ってみようとして作られている。そこに一軒家ならではの人生が詰まっている。これも視聴率は高い。CPは『ピフォーアフター』を作っていた植田貴之。

D 木曜は『プレバト』(MBS・7時)が好調。俳句の夏井いつきは昨年度放送文化基金賞の個人賞を受賞している。夏井と梅澤富美男のやり合いが面白い。ゲストの人選がうまい。こんな奴が俳句がうまくていいのかと思わせる。

A 『チコちゃんに叱られる』(NHK・金・19・57)は非常にうまく出来ている。「面白くてためになる」が昔からのNHKバラエティーの基本だが、いま知的エンターテインメントは民放のバラエティーで主流になっている。しかしチコちゃんというキャラクターを作ってまわすのはユニークだ。

B これは共同テレビの制作。最初フジに企画を持ち込んでそのままにされていたのを、NHKが受け入れた。

C あれはNHKだから面白い。視聴率は今週ベストテンの3位、大河ドラマよりはるかに高い数字だ。そして、再放送の方が数字は高い。金曜日の夜やって翌日8時15分からというやり方がうまい。

D NHKらしく、きちんと取材して裏をと

り「これホントなのよ」とやるから信用されている。

A 若者がスマホでテレビを見、視聴ターゲットを絞った番組が多いのだが、茶の間で見る全年齢層を対象にする路線を諦めてはダメだ。「チコちゃん」は全年齢層にうけている。

B NHKは、金曜日に若者を含めた大人、土曜に子どもを中心にした家族と視聴対象を意識しているのだろうか。

C 民放は土、日も定時、レギュラー編成を守るが、NHKはラジオも含めて必ず特番を編成する。それは全世代の視聴を意識しているからだ。

【ラジオ】

D ラジオのトップピクスではTBSがナイターオフ編成をやめ、通年編成にして『アフター6ジャンクション』(月〜金、18時〜21時)を始めた。出だし順調だ。スタジオコンサートあり、映画の紹介・批評を語り続ける時間があり、サブカルチャーをふんだんに取り込んで極めて挑戦的だ。

A そのTBSはこの12月で17年4カ月聴取率トップを走り続けている。TBSにとつてはいいことだろうが、ラジオ全体としては悪い。それを意識してか、TBSラジオの三村孝成社長は「聴取率はもういい」と聴取率調査が行われる週間について「スペシャルウィーク」の呼称をやめ、この週だけサービス

賞品をプレゼントするのをやめた。

ラジオはいまやラジオで聞かないのが当たり前。ラジオやスマホで聞くのが常識だ。放送された時間でなく聞くタイムフリーも多

く、地方局のものが聞ける面白さもつけているようだ。昨年、ラジオがほぼ全国に行き渡って、ほぼ全部の県の番組が聞けるようになった。

B 推薦番組をあげたい。まず、TOKYO FMの『村上RADIO』。村上春樹がDJとしてまず8月5日に第1弾をやり、10月21日に秋の夜更けをやり、12月にクリスマス特集をやった。ユーチューブでも聞けるのでぜひ聞いて欲しいと思うが、音楽番組として非常に優れている。村上春樹が自分の好きな音楽を自分の好きなように流している。勿論構成作家もディレクターもついてチームは延江浩さん。これからも2ヶ月に1回くらいやる予定だ。

C TBSが聴取率トップを走っているのは1日の始まりに『森本毅郎・スタンバイ』があるのが大きい。この番組は1990年スタート。当時はニッポン放送全盛で、この時間では高嶋ひでたけが「中年探偵団」をやっていた。「森本毅郎」はなかなか抜けなかつた。じわじわ追いついて追いついたとき、TBS全体の聴取率はトップになっていた。それからほとんど引き離して行く。TBSが強いのは朝に森本毅郎、夕方に荒川強啓、夜に荻上チキがいることだ。この3つの報道系の間を情報系で埋めるTBSの編成力は凄い

が、なんといっても最初が大事だ。これまで何故か褒められたことが少ないが、ラジオに来て4半世紀、自分の城を守っている。彼も喜寿を過ぎた。

B その次にニッポン放送のラジオドキュメントラリー『My Dream』をあげたい。民放連グランプリと芸術祭大賞を受賞。内容は全員の少女の話で、東日本大震災にあり、ニッポン放送はそのときから毎年首をとっていた。いま大学生で7年の集大成を今年出した。彼女のキャラクターが良くて、聞き終わって爽快感がある。

—この後、座談会は雑談風になり、グランプリの賞の形について、賞のネーミング、部門などの議論があつたがこの記録では割愛する

—

【座談会の次第】

日時 1月25日(金) 午後1時半〜5時

場所 千代田放送会館 3階会議室

出席者 伊藤雅浩 隈部紀生 菅野高至 鈴木典之 鈴木嘉一 西村与志木 藤久ミネ 逸見京子 前川英樹 三原治 吉田賢策 渡辺紘史 書面参加・河野尚行

【今後のスケジュール】

2月15日 会報発行

3月15日 投票締め切り

3月29日 選考委員会

4月20日 理事会(内定を報告)

5月18日、放送人の会総会のあと贈賞式

きょうの料理 (NHK)

日時・12月8日(土) 13時半〜16時半
会場・横浜情報文化センター・情文ホール
ゲスト・

堀江ひろ子(出演・料理研究家)

ほりえさわか(出演・料理研究家)

後藤繁栄(番組司会・フリーアナ)

佐野朋弘(テキストブック編集長)

大野敏明(元担当C・P、現放送文化研究

所副部長)

総合司会・渡辺紘史(放送人の会)

ゲストは堀江家の女系3代が料理研究家を勤めるというユニークな堀江ひろ子、さわこの母娘コンビに、当意即妙の駄ジャレで評判の後藤アナ、それに「食通」でも鳴るベテランの佐野・テキスト編集長と、制作現場の生き字引のような大野・元チーフプロデューサー。互いに気心も知れた5人が、大野さんの巧みな誘導で、のっけから本音にユーモアを交じえた話し上手ぶりを全開するので、満員の会場は終始笑いに包まれながら得難い料理談義を楽しむことになりました。
女性の目立つ(男性もちらほら)客席は意



堀江ひろ子氏



ほりえさわか氏



大野敏明氏



佐野朋弘氏



後藤繁栄氏



司会・渡辺紘史氏

外に老若のバランスがとれていて、さすがにテレビ界随一の「国民的」長寿番組の底力を感じさせると共に、飽食時代を煽る派手な風俗情報に逆らう、根強い家庭の手作り料理尊重の美風が見てとれる雰囲気でした。
総合司会の渡辺紘史さんが、若い女性層へのサービスのつもりで、前説で戦後の「飢えて死にそう」な食糧難の苦勞に触れましたが、後で「料理に関心を持つほどの人は、食の歴史のことも皆わかまえていることが客席の反応でわかった」と、老婆(爺)心に終わったことを喜んでいたので印象的でした。
番組「きょうの料理」は、マナ板に当たる包丁のリズムのような木琴のテーマ音楽に乗って昭和32年11月に初登場。経済白書が「もはや戦後ではない」と力んだものの庶民はまだ窮乏から脱しきれない時代が背景。たちまち関心を呼んだ創作レシピも、講師が「材料をゆつくりもうしあげますから、どうぞお書取りくださいませ」と呼びかけ、視聴者は必死にメモしながら視るのが前提でした。以来61年間、変転めまぐるしい時代相に寄り添って、庶民生活の食と健康の頼もしい下文え役と認められ、ケタ外れの長寿番組になりました。

放送は月々週4回、延べ回数は1万5千回、「視ながらの書き取りは不便だ」の声に応じて翌年創刊されたテキストは通巻626号を数えて販売は計4億冊。登場した講師の先生は1,300名、調理し紹介したレシピは4万種類以上。インターネットでのレシピサイト・サービスも開始し、今、ツイッターは3万5千人がフォロー、ラインの登録者数も59万人。
進行役の大野さん自ら編集の懐かしい番組映像が効果的に上映されて、驚きと興感を盛り上げ土井勝、陳建民、村上信夫、江上トミ、飯田美雪らスター講師たち、堀江家初代の泰子さんも草創期を支えた一人。2代目ひろ子さんは大学生の時から母泰子さんの助手として登場し、出演歴35年。3代目さわこさんも先ず母ひろ子さんの助手で初々しく登場、以来満10年の出演。

闊達な堀江母子は、4世代9人の大家族の日常食から発想され、試され、練り上げられる苦心と自信のレシピを全国で生かしてほしい願いを、実生活のエピソードや番組での失敗談も交えて本音で熱く語り、後藤アナが駄ジャレの突っ込みで笑いの句読点をつけ、佐野編集長がテキストの売れ具合でレシピの手ごたえを検証してみせる。この「三段論法」が会場を和ませ、納得させます。
料理番組は民放各社でも立ち上げ、バラエティー仕立ての娯楽性も工夫されましたが、「きょうの料理」は30分枠で、アナウンサーが進行し、講師が段どりよく料理しながら作り方を丁寧に教えるだけのスタイルを崩さず、この簡潔さが好感されて長寿の因にもなっているようです。
講座の後半、30分枠番組の作られ方に話が進んで、「本番は一発撮り、編集なしでかつきり24分30秒におさめる」鉄則の実践談に移ると、会場にも確かに緊張感が走りまします。1回の番組当たり本番まで半年もかける各段階の綿密な準備内容が、思いのほかの大変さで、スタッフ一同毎回胃の痛くなる思いで取り組んでいるという実態が、こもこも淡々と、ユーモアと笑いを交じえて語られ、反ってその苦勞の真実味が強く胸を衝くからでした。会場の反響は、時間オーバーの終了時の拍手の大きさに正直に現れていました。来場者たちには、おみやげとして堀江家3代の講師が一品ずつ推す自慢の「節約&スピード料理」のレシピがカラー写真付きで配られました。さて、今夜の食卓にどれが生かされたでしょうか。

いろはに時代劇

〜その式拾式〜

菅野高生

1年ぶりの連載になるが、宜しくお付き合いのほどをお頼み申します。

話は95年の正月時代劇『清左衛門残日録』のマドンナ、浅丘ルリ子さんと大河ドラマ『花神』（77年放送）の話である。

76年の夏、ドラマ2年生の僕は自ら立候補して、準備に先行する『花神』のチームに入る。赴任が山口放送局だったので、当地感覚で、演出助手を引き受ける。司馬遼太郎原作の物語は、浅丘さん演じるイネと中村梅之助の村田蔵六（後の大村益次郎）との間でラブストーリーラインを紡いで行く。この時、浅丘さんは36才、若く、それは美しかった……。

物心つく前に生き別れとなった父・シーボルトへの憧憬から、イネは蘭学を修め、医師になることを志す。父の門下生で養育を託された宇和島藩の町医者・二宮敬作（大滝秀治）から、産科を学ぶことを薦められ、一八四五（弘化2）年、父の門下生であった備前国（岡山）の石井宗謙（小松方正）の元に弟子入りする。だが、蘭語もろくに教えてもらえず、挙句に手篋めにされて子を身籠ってしまふ。女たらしの宗謙を、小松方正ならではの怪演で、誠に嫌らしく演じた。

当時の時代感覚では、主人や師匠が弟子や使用人に関係を迫ることは、異常とは考え無かったが、イネは師匠の娘であったために、宗謙はシーボルト門下生から、破門同然の扱いを受ける。

その後イネは、緒方洪庵（宇野重吉）の使

いで、宗謙を訪ねて来た、蔵六と知り合う。そして、一八五四（嘉永7）年2月、蔵六が

蘭学講師として宇和島藩に招聘されると、二宮敬作の紹介で二人は再会して、イネは蔵六の個人レッスンを受講することになる。一年余、二人きりの濃密なレッスンが続く……。

克蘭クイン前の考証事で、話題になったのは、シーボルトのオランダ語ほどの程度のものであったか、と云うことだった。

一八三三年、長崎出身のオランダ商館医となったシーボルト（27）は元々ドイツ人だった。出島の通詞から「オランダ語にしては発音がおかしい」と怪しまれて、「自分はオランダ山地出身の高地オランダ人なので訛りがある、山オランダ人」だと言ひ繕って、その場を切り抜けたと言ふ。イネも父親を「山のオランダ人」と思っていて、後年、実際はドイツ人であることを知り衝撃を受けるといふ逸話がある。

つまり、シーボルトはドイツ語風の怪しいオランダ語を話していたのだ。やがて、脚本で、イネが父恋の唄をシーボルトの『オランダ語』で歌うシーンが出て来た。

19世紀初めのドイツ語的、オランダ語とは一体、いかなるものか！ 再現してくれる人はいるのだろうか？ ロケも含め収録にも立ち合ってくれる……残念ながら、そんな都合の良い研究者は存在せず、結局、オランダ語の古語が出来る、高齢の学者さまにお願いする。

次に、原書講読のシーンで出て来る医学用語の翻訳にも、やはり専門家が必要となつて、73年放送の「赤ひげ」を担当した、

順天堂大学の酒井シヅさん（講師）の門を叩き、医学考証をお願いする。

酒井さんは一九三五年生れで、三重県立大医学部から東大大学院に学び、69年に順天堂大学助手となり、75年に講師になっていった。スタツフの疑問に、打ては響くように答えを出して、「史実では出来る、嘘になるから出来無い」、その判断が早いのだ。嘘と分かった上で、ドラマ的に成立させる工夫を一緒になって考えてくれる、実に柔軟で優秀、快活な方であった。ぼくら演出助手たちの間では、資料に埋もれた医学史学研究室に通うのが、息抜きのような楽しい一時になっていった。

日本医史学会理事長、順天堂大学名誉教授。酒井さんは未だに現役で、「いだてん」の医学考証を担当している。酒井さんが書いた講談社学術文庫の『病が語る日本史』は、お薦めの読み物です。

プロデューサーの成島庸夫さん（通称ナルさん）には、伝説がある。『花神』のプロデューサーを引き受けるにあたって、彼は上司の川口幹夫さんに、念を押した。

「僕は（性格が）地味だから、作るドラマも地味になる。しかも外題は維新もの、地味になる。脚本家の大野靖子も然りで、主役は中村梅之助。視聴率は絶対に取れない。それでも、私で良いのか？」

「視聴率は取れなくても構わない」「地味で、本当に、取れないぞ！」

「大河第15作でこそ、『花神』はやるべき企画だから、視聴率は取らなくていい！」

——大意、このようなやり取りがあったと伝わって、スタツフ、キャスト間では、ひそかな伝説となった。

放送第1回の視聴率は予想通り（？）

16・5%と、過去の大河で最低となるが、チームの雰囲気は沈むことはなかった。女っ気はまるで無いのだが、何より、脚本が面白かった。

配役も、地味な蔵六がまぎれるように、主役の周りに、松下村塾の吉田松陰（篠田三郎）や、奇兵隊の高杉晋作（中村雅俊）、西田敏行（山根狂介）、尾藤イサオ（伊藤俊輔）、東野英心（井上聞多）など、躍動感あふる若い志士たちを配して、青春群像劇を展開して行った。

女っ気は無いが、スタジオはいつも活気が溢れていて、役者たちが楽しんで演じていた。それは、汗臭い体育会系のノリだった。週3日収録の最終日、毎週金曜日の深夜から、NHK近くのスナックで、志士たちと一緒に飲んで歌って、ちよつとだけ議論して、みな朝帰りになった……。

ちなみに、平均視聴率は19・0%、最高視聴率は25・9%。歴代大河の中でも低い方だが、未だに「面白かった」という声を聞く。振りかえって考えると、玄人受けのする大河ではあったようだ。

上司への「僕は地味だよ！」という「ナルさん流の牽制」は、その後、僕の引出にもなつて、プロデューサーとして何回か使わせて貰ったことがある。

「地味だけど、NHKは、やるべきでしょ……。」と。

（つづく）

第10回

「ラジオ聞き酒の会」実施報告

ニッポン放送制作「マイ・ドリム」

報告者 永田俊和

10回目を迎えた「ラジオ聞き酒の会」は新年を迎えた2019年1月15日にニッポン放送制作の報道スペシャル番組「マイ・ドリム」をとりあげ、ニッポン放送の第3会議室で開催した。

この番組は「視覚障がい者の職域の拡大や共生社会の実現」をテーマにした社会報道番組で平成30年の日本民間放送連盟賞でラジオグランプリを獲得、さらに文化庁芸術祭ラジオ部門ドキュメンタリーの部で大賞を獲得する等、2冠を制した作品。

今回は会員13人が参加し、この番組の制作者である上村貞聖氏（プロデューサー）と森田耕次氏（ディレクター）を招き三原治氏（放送人の会理事）の司会で進行した。

昨今、パソコンの音声補助の進歩などで、視覚障がい者の情報処理能力は健常者に大きく近づいているとはいえ、希望する職業に就くことは容易ではない現状がある。

この番組は、東日本大震災の取材を進める中で出会った視覚障がいのある小椋汐里さん（当時中学1年生）を長きにわたり取材したもの。会津若松の小学校で被災した彼女は、その後福島盲学校現在の福島視覚支援学校に進み、現在は東北学院大学の英文科の学生

として、通訳や英語教師を目指して勉学に励みながら、自分の将来を夢見て積極的に活動している。番組では、彼女の中学1年当時から今までを紹介しつつ、大学関係者や仕事を持つ様々な視覚障がい者、彼等を支える人々を丁寧に取材。彼らが社会の中でどのように道を切り開き、生きてきたかを伝えるという構成になっている。

番組聴取終了後、当日参加者の自己紹介を兼ねて感想や評価、疑問点等を語りあった。

参加者からは、極めて長期にわたる、幅広い取材の粘りなどを讃える意見が相次いだ。また「聴取者には番組内で使われた『白杖（はくじょう）』という単語は耳で聴くだけでは判りにくいのでは」といった指摘もあった。

上村プロデューサーからは、番組内の英語スピーチコンテストの部分は実際のコンテストの音声ではなく、番組用に収録させてもらったものだった、といった業界関係者中心の会ならではのウラ話も披露された。その後、有楽町の居酒屋に会場を移して懇親会を開いた。次回「第11回ラジオ聞き酒の会」は2月5日（火）パセラリゾート渋谷店でNHKの迎康子アナウンサーをゲストにNHK「ラジオ深夜便」を取り上げる。（放送人の会理事）

入会のご挨拶

林宣昭

このたび放送人の会に新規入会しました株式会社ナインスピートというラジオ番組等の

制作会社の代表をやっております林宣昭です。この場をお借りしまして、軽く自己紹介をしたいと思います。

大学卒業後、最初に放送に関わる仕事をやるようになったのは、株式会社文化放送に入社したのがきっかけでした。在職中は業務部制作部、事業部等に所属し、様々な放送番組の制作やイベントの制作運営等に関わりましたが、5年ほどで文化放送を退社し、ラジオ番組の制作会社を設立。折しも関東地区を中心に乱立し始めた民放FM各局、続いて大阪名古屋、福岡等々、数多くの放送局の番組創りを積み重ね、現在に到っています。

また、学生の頃より、ピアノやエレキギター、シンセサイザー等のキーボードによる音楽制作を行っており、ヤマハのコンクールでは世界大会に出場した事があります。その全国大会の時の司会が小林克也氏。世界大会の司会がジュディ・オングさんだったので、文化放送に入社後、そのおふたりが当時のQRで番組を持っておられ、不思議な縁を感じると共に、小林克也氏とは洋楽のカウントダウン番組を一緒に一緒に、後の放送現場における様々な方法論を学ばせて頂いたのが、非常に大きな財産になったと思っております。またあと数年ほどは、現役で放送現場に携わっていると思いますが、この会を通じて色々な方々のお話を聞けるのを楽しみにしております。

先日早くも、有楽町のニッポン放送におい

て行われた第10回「ラジオ聞き酒の会」に初参加させて頂きました。当日は平成30年日本民間放送連盟賞ラジオグランプリを受賞した番組を全員で試聴しその後意見を述べるという、いわゆる日本の会議スタイル。もう長年「会議」というものに参加していなかった自分にとっては新鮮さと驚きが混ざったイベントになりました。また良くも悪くも、AMラジオの番組スタイルが変わっていないというのも再認識。受け手の側は時代を経ても、その聴取スタイルは変わっていないのか、或いは世代によってはズレを生じているのはいか、などと考えを巡らせながら聞かせて頂きました。

ところで、私は20代の頃から東アジアや欧米を中心に、様々な国や地域に出かけ、その土地土地のメディア事情や教育事情、特に音楽教育事情について取材したり、実際に教育を受けている側の方々からも話を聞いたりしてきました。そんな中で得てきた、学ぶべきシステムの在り方など、今後放送人の先輩の方々との会を通じてお話しさせて頂く事が出来ればとも思っています。もしかするとこれからの私のライフワークのひとつになるかも知れません。

そんなわけで、ここ数年も、現在も海外へは頻繁に出かけていますが、引退後はピアノリサイタルでもしながら、国内外も巡ってみたいなど目論んでおります。

（ナインスピート代表）

公開セミナー

第20回 放送人の世界

「右田千代〜人と作品〜」

日時・12月2日(日) 13時〜15時

場所・上智大学 6号館・101教室

講師・右田千代

聞き手 今野勉

長谷川美波(上智大学・学生)

主催・放送人の会、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所

―ナリズム研究所

まず、主催者上智大学メディア・ジャーナリズム研究所の**音好宏**教授から、「国際性豊かな上智大の学生、特に女子学生には、右田さんのドキュメンタリーに非常に関心がある」と歓迎の挨拶があり、次いで放送人の会・**今野勉氏**から「この『放送人の世界』のシリーズでこれまでに登場した女性はOBの市岡康子さんだけで、現役の女性は右田さんが初めて。楽しみです」と紹介があつてセミナーは始まった。

右田さんのプロフィールは会場に配布された資料に左記のように紹介されている。

NHK放送総局・大型企画開発センター・エグゼクティブディレクター。1965年東京生まれ。1988年NHK入局。報道局、衛星放送実施本部、広島放送局などを経て現職。「クローズアップ現代」や「NHKスペシャル」などを企画制作。芸術祭賞、ギャラク

シー賞、モンテカルロ国際テレビ映像祭賞など国内外で受賞多数。2010年放送ウーマン賞受賞。

【最初の上映番組】

「隣人たちの戦争〜コンボ・ハイダルドウ

シイ通りの人々〜」(1999年放送)

右田 私が原爆、戦争というテーマに出会ったのは広島放送局です。被曝50年のときに広島で出会った被爆者の方々から、「名もある顔もある一人一人が歴史を作ってきているのだ。被爆者とひとくくりにできない一人一人の人生がある」ことを教わり、それを記録することが私のテーマになりました。その思いを持つて東京に転動してきたとき、コンボ紛争が起り、私は報道局でしたので、「クローズアップ現代」の取材として難民キャンプへ入りました。難民の方たちは東洋の名も知らないメディアの人間である私に優しく、なげなしのコーヒーやチョコレートを配って下さった。そのアルバニアの難民の方たちに心を驚掴みにされ、取材を続けました。

99年のコンボ紛争はNATO軍の空爆で終わるのですが、その6年後もう一度取材に入つて「隣人たちの戦争〜憎しみ」の通りの6年」を作りました。NATOの空爆は当時「正義の戦争」と言われたのですが、本当に正義だったのかと考えさせる事態が起こりました。イラク戦争です。その年、取材に入つていきます。まず番組をご覧ください。――この作品は、コンボの裏通り・ハイダルドウ

ウシイを舞台に、互いに支え合つて暮らしてきた人々が、憎しみ合う民族紛争にまきこまれる悲劇を描いている。親密だった二人の母親は敵味方に分かれ、その息子たちは銃口を向け合う兵士になつた――

長谷川 もう一度取材までの経緯を、説明ください。



右田 当時、シリア難民100万人というのが大ニュースで取材に行け、何日か後に「クローズアップ現代」で出す、というのがきっかけでした。コンボのことは何にも知らずに行きました。難民キャンプは言葉が失うような悲惨な状況で、一つのテントに何十人もが住み、食事のために長い行列ができていました。そこで出会ったアルバニア人の取材からこの番組の取材が始まりました。アルバニア人を紹介してくれた人に通訳など一緒に協力してもらつて、「彼は何かをもっている」と聞いては取材しました。

長谷川 右田さんはどんな方に惹かれて取材

したのでですか？

右田 あのお母さんは本当の母親のように暖かい方で、私たちが遠い国からやって来ていて、コンボのことを遠い日本で放送してもあの人たちの状況に影響はないと知っているのですが、優しくしていただきました。あのとキ貴つたチヨコレートをまだ捨てられないでいます。NATOの空爆でセルビア政権が倒れたらこの人たちは戻れる。それが見たいと思つて取材していました。

今野 セルビアとアルバニアの言語、通訳は？

右田 アルバニア語を話せる通訳を探したいとアメリカ大使館に聞くと、バイトをしたいという難民がいると教えてくれました。その人はコンボの高等裁判所の判事の息子で、英語でアルバイトをしていました。

今野 セルビア語は？

右田 コンボはセルビア共和国コンボ自治区という位置づけで、セルビア人にとつても聖地です。当初はアルバニア語よりセルビア語の方がメインだったと聞いています。

今野 双方の関係は微妙で、右田さんのチームは双方に取材していますし、そのことをお互いに知っていたと思いますが、問題はなかったのでしょうか？

右田 ロシア、欧米各国はそれぞれの立場が問題になったのですが、日本は極めてイブ的な立場として受け入れられました。それで私たちは双方の取材をしていたのですが、灰

色の屋根の家のセルビア人の方が「アルバニア人を取材している奴とつきあっているのか。今度来たらただじゃおかない」と脅迫されていたそうです。私は当時未熟だったので、どうすればいいのかわからなかった。それで稲川カメラマンに相談しました。小型カメラでこっそり撮ろうかとも提案したのですが、じつと聞いていた稲川さんは「人を殺してまで作る番組はないだろう」とぼつりとおっしゃって、それでセルビア人の取材をしばらくやめました。しばらくして、セルビア人の方から「もう大丈夫です」と連絡があつて取材を再開しました。

長谷川 こんな遠くで起こっている紛争を日本人に身近に感じてもらおうよう工夫したことはありますか？

右田 そのことはあまり考えなかったのですが、その後イラク戦争が起こり、NATOの空爆は正義だったのか、あの時放送した番組は正しかったのかと考えるようになりました。それでもう一度、コンボのハキルさんやブラーナさんに会いに行きました。するとブラーナさんはコンボ独立のあとセルビアへ行き、そこで亡くなつており、銃を向けたという息子さんもアル中になつて亡くなつていました。そのことをハキルさんに伝えると驚いて僕、あのときは恐怖で自分を抑えることができなかった。しかしブラーナさんは悪くない。あの人を許してください」と言った。私は「コンボ紛争には勝者はない。銃を向け合うこと

でそれまでの人間関係が壊れてしまったのだ。気づいても遅いことが起きてしまったのだ」ということを訴えたいと思つて番組を作りました。

【2番目の上映作品】

「被曝治療83日間の記録〜東海村臨界事故」(2001年放送)

右田 東海村臨界事故では二人の方が亡くなりました。この番組はそのなかの一人の方の治療の記録です。事故が起こった99年秋、私はコンボに取材に行つており、帰つて新聞を切り抜いて重大なことが起こっていると知り、取材しました。

99年9月30日。東海村JOCで臨界事故が起こつた。被曝したひとり大内久さんは激しい痛みとともに嘔吐し、呼吸困難に陥つて意識を失つた。この時の被曝線量は17シーベルト、年間許容量の2万倍である。大内さんは東大附属病院救急部集中治療室で治療を受けた。容態は絶望的で、染色体が破壊され白血球がほぼゼロ。身体は重症の火傷のように赤く爛れ、細胞の再生機能は失われていた。この番組は前川和彦医師を中心に治療に当たつた医療チームと大内さんの必死の83日間の記録である。その間、皮膚の移植は失敗し、輸血した妹さんの血液は、大内さんの体内で染色体が破壊されていた。

右田 先ほど言ったように最初は新聞の切り抜きです。それで担当医が前川さんだと知つて電話すると、前川さんはメディア不信で非

常に怒つていて、「一切答へたくない」とおっしゃる。それで引き下がれませんか「何が不満ですか？」と聞くと「いのちの視点欠缺している」とおっしゃる。そんな先生にはぜひ話を聞きたいと思つて会いに行きました。それから半年取材が続きました。医療についても放射能被曝ですから、原爆報道の延長線での仕事です。

今野 私はこの番組で放射能で死ぬというところがどんなことか初めて知りました。原爆の高熱と爆風による死者の具体的なイメージはわかるが、放射能で死ぬ具体的なイメージは知らされていなかったように思います。原爆の恐ろしさはこんなことだったのでですね。

右田さんが前川先生の言葉に引つかからなかつたら、伝わっていない。「いのちの視点」というのは一つの命がなくなつて行く、それに対する憤りを番組にすることでしよう。非常に難しいことをやったのだと思います。同じ素材を前にして琴線への引つ掛かり方が違う。

右田 私は原爆を知つてから「ネタ」という言葉を使えなくなりました。被爆者のいろんな方の話を聞き、一緒にカラオケで歌を歌つたこともあり、東京に来てから「約束がある。何かをしなくてはいけない」と思い続けてきました。

今野 右田さんが引つ掛かる具体的なものが何かあつたと思えます。

右田 放射能障害を象徴するのが大内さんの手だつたと思います。右手の赤く火傷してい

る映像です。遺族の方から「あの映像だけは使わないで欲しい」と言われました。私たちはカルテがあることも、あんな写真があることも知らなかったのですが、前川先生から被曝の実態を知らせるために使つて欲しいと言われ、遺族の方にお許しをお願いしました。すると「前川先生を信じて、お任せします」と返事がありました。

【3番目の上映作品】

「日本海軍 400時間の証言 第2回 特攻 やましき沈黙」(2009年放送)

右田 2001年9月にアメリカ同時多発テロが起こつて、日本の防衛はどうなつていいのか、陸上自衛隊と海上自衛隊に取材に入りました。取材して関係者の方との仲が深まつているうち、海上自衛隊の研究者の方と親しくなつたのですが、5年ほど経つて「こんな資料があります」と突然開示してくださいました。「海軍反省会」という、戦後海軍の幹部たちが130回も行ってた会の録音テープでした。ここからこの番組が始まりました。

昭和55年から11年間、海軍軍令部の参謀を中心に、戦争の真実を語り残そうと、生存中は絶対非公開を条件に行われた「海軍反省会」は、開戦までの経緯、政界、皇族、陸軍への働きかけ、など400時間にわたり記録されており、放送はこれをまとめて3回に分けて行われた。今回上映されたのはそのなかの第2回で、「特攻」。昭和19年10月に始まつた特攻作戦で戦死した将兵は5千人以上。

海軍反省会では「特攻」は始まる1年前から組織的に計画されていた事が赤裸々に語られているー

右田 特攻は現場からの要請ではなく、軍令部から生まれたことが証言で明らかにされています。私は中沢軍令部長が「特攻」に関与していないと言ったということに拘ったのですが、そのことは録音にありました。テープの最後の方で、中沢部長が「あれはわたしの知らないことだよ。なあ、土井君」と言う。「いえ、部長の印をいただいています」と言ったという証言があります。中沢部長が戦後も一貫して責任を回避したことは、私たちにもある責任を逃れたいという気持ちに通底するものです。私はこの番組を歴史番組ではなく現在の若者にも伝える報道番組として作りました。ですから、「私たちは」でなく「私は」と自分の思いを語りました。特攻作戦を発案したと言われる大西中将の息子さんに取材しましたが、「あれは、やましき沈黙」であった」と大西中将は言っていたそうです。これは私たちの問題でもあるとタイトルに使っています。

【4番目の上映作品】

「きのこ雲の下で何が起きていたのか」2015年放送

右田 被曝から60年、70年経って多くの人が病気で話が出来なくなったり、亡くなったりにしている中で、被曝の瞬間何が起こったかを伝えられないかと考えてきました。被曝当

日のキノコ雲の下の写真は3枚だけ残っています。その写真を使うことでやっと企画にゴーサインが出ました。この写真は亡くなった方も知っている写真で、当初は加工することがやってはいけないことだと思っていました。が、写っている何人かが生きていて「こうだった」と言っていた。うちに動画にして、若い人に見てもらおうと思えました。そうすることで、本当にあったことだと感じたと感想をいただきました。この中には坪井直さんというオバマと会った被爆者が写っています。私が広島局にいたときからずっとお世話になっている方ですが、ずっと見せていただけなかった背中の傷を今回初めて見ました。

ーこの番組で使われた写真は中国新聞の松重美人さんが爆心地から2・3キロ、御幸橋で撮影したものの。ここに写っていて番組で証言しているのは河内光子さん(当時13歳)と坪井直さん(当時20歳)。河内さんが気にしていたのは左前に写っている女性で、黒くみえるものを「起きて！」と叫びながら揺すっていたという。この証言をもとにCGで動画が作られた。坪井さんは熱線で火傷を負い、耳が半分ちぎれ、治療できるところを探して御幸橋に辿り着いた。周りに火傷に油を塗っている人があり、坪井さんは治療の順番を待っている。この写真を見た原田輝一医師は火傷した女性の皮膚は原爆の高熱で皮膚の下の水分が一瞬に蒸発し破裂した「フラッシュバーン」だと指摘し、この指摘に基づいて番組で

は皮膚の色を再現した。：以下略ー

右田 坪井さんが忘れられないのは自分の痛みでも、周りに座り込んでいた怪我人でもなく、一人の少女です。ちょうど御幸橋へトラックが来て少女が駆け寄るところを坪井さんはみていたそうです。トラックに乗っていた軍人が(当時睦部隊などいるんな軍人が入っていました)「こらー」と怒った。それでトラックに乗ろうとしていた少女は飛び降りて逃げ、爆心地の方へ走り去った。それを坪井さんは今も忘れられない、と言います。当時坪井さんは二十歳でしたが、大人が始めた戦争で少女が何故あんな目に合わなくてはいけないかったのかと強く思ったそうです。

もう一人河内さんは、女性が赤ちゃんを抱いて「起きてや、起きてや」とこうやって動いてたんだと教えてくださった。初めて動画の動きがつけられました。黒焦げになった赤ちゃんのお母さんお姉さんかわかりませんが、周りの人がびっくりするような大きな声で「起きてや、起きてや」と言っていたそうです。

火傷は電子レンジに腕を入れてチンして皮膚が破裂する、そんな火傷だと映像から研究者のかたが明らかにしてくれました。

長谷川 3本目、4本目を通じて、私が共感したのは、一人ひとりがどのように亡くなったかに焦点が当たっていることでした。それがいちを伝える右田さんの拘りなのでしょうか？

右田 「きのこ雲の下で…」は3回のシリーズでしたので、毎回「ひとり一人のいのち」という言葉を入れていきます。私たちは無名、歴史に名を残さない人たちに励まされたり、大事なことを教わったりしています。共感していただけてありがとうございます。

令野 「400時間…」のテープがあると戸高さんが教えてくれたのは凄いいことだと思いますか？

右田 私たちが自衛隊の成り立ち、自衛隊の過去に踏み込んだときに出会った方で、海軍史の研究者として名高く、今は大和ミュージアムの館長をしておられます。もともと建築が専門ですが海軍が大好きで、「海軍反省会」に出席して話を聞いておられた。「子供たちの戦争」という番組で昭和館という戦争の遺品を集める所から資料を借りたことがあります。戸高さんはその映像部長をしておられて、知り合いになりました。戸高さんはあまりにも面白い方で、知識が豊富で、本に書かれていない歴史を沢山話ってくださいだったので、戸高さんを招いて勉強会をすることになり、3ヶ月に1回くらいやりました。ある時の勉強会の後、食事していると戸高さんが突然テープのことをおっしゃった。戸高さんとしては海軍の先輩たちから託されたテープをいつまでも一人で持ち続けてはいけない。ではどうするかと考えておられ、年齢も50歳で、たまたま私たちの会にであった、ということかなと思います。

今野 400時間全部聞いたのですか？

右田 はい。聞きました。開戦のときのことなど「ちよつと失敗したよね」とか笑いとともに語られています。昭和19年以降、日本がどんどん敗戦に向かつて行く時期についてもお互い解っているせいか「あれ、やつちやたよね」と笑っている。第三者として聞くと、何故こんなところで笑えるのだろうか、誰が日本を破滅させたのかと憤りを覚えました。それをどんどん聞いていくうちに先ほどの「やましき沈黙」ではないですけど、自分たちもやりかねないのはいないか、それを乗り越えなくては本当の反省にならない、と自分たちの問題になってきてこういう番組を作りました。

今野 400時間は1日10時間聞いても40日間かかりますね。

右田 時間はかかりました。テープを預かったのは2006年で、私は高齢出産で育児休職に入った時期です。家に持ち帰って聞いたのですが、出産でそれどころでなく、聞くのに2009年までかかりました。子どもにミルクをあげながらテープを聞き、その子どもが特攻兵になることを想像しました。

今野 テーマである「やましき沈黙」は戦争についてまだこれだけ知らないことがあるとの表明だと思えますが、テープを渡されたことについて、いま見ての感想はどうですか？
右田 門外不出というところで語られていることを出すのに後ろめたくはないのかと気にはなりましたが、会で語っていた方の中に一人

黒島さんがご存命で、その後亡くなられました

たが、戸高さんが持っている以外のテープをお持ちで、戸高さんに預けられました。そのこともあつて後ろめたさはなくなつたと思えます。その後戸高さんはテープを文字に起こして出版されています。

長谷川 広島のたつた2枚の写真からあれだけふくらませる創造力を感じました。一人一人に焦点が当たつて、その話を伝えようとしていると強く感じました。温かい人の気持ちが見えたドキュメンタリーだと思います。

右田 番組の後半に出てくる児玉光雄さん、桑原千代子さんは写真には写っていませんが、あのときあのそばにいた人です。児玉さんは橋の欄干、カメラマンのすぐ横にいました。写真の中にいる人、そばにいた人一人一人に取材してこの番組ができました。

今野 写真を動画にすることに抵抗があつたとのことですが…

右田 亡くなつた方の写真を加工するなんてとんでもないと先輩から言われました。私たちもそう思っていました。しかし、坪井さんや河内さんが生きておられる今でなくてはできなくなると踏みきました。

今野 あの映像が動き出したのは衝撃です。死者の尊厳というものもわかりますが、写真だけではあの赤ん坊をどうしていたのかかわらない。そばにいた人の証言があつたからあのお母さんがあのどき赤ん坊を揺すつていたのかがわかつた。動画にしたことはあの親子の

ためにもよかつたことだと思えます。

右田 「起きてや！」と言つていたと証言したのは河内さんで、CGを河内さんに見て貰つて、違つと言われたらやめようと思つていました。河内さんは見て、この通りだつたとおつしやいました。坪井さんの前で子どもたちが動いているCGも坪井さんに見ていただいて「この通りだ」と言われました。

長谷川 右田さんの作品は素晴らしいと尊敬していますが、それ以上に子どもさんを育てながら、介護をしながらこんな作品を作るのができたことを尊敬しています。どうしたらこんなことができるのでしょうか？

右田 40歳までは夫と子どもと仕事でしたが、40歳を過ぎて夫の母親が認知症になり、父は口が不自由になつて二人の介護が同時に始まりました。それで仕事の仕方を全く変えました。皆さんに迷惑をかけた、役立たずだつたのではないかと思います。しかし、その間「死」と向き合い、「死」を考えていました。それで臨死体験の番組を作つたり、時間はかかりましたが、自分にしかできない番組への関わり方をしたと思います。「400時間」は大きな番組で、子どもを育てながらでは集中力が欠け、そのため編集が遅れてしまつて、3回シリーズのうち他の2回は後輩が編集をしました。私は彼らの編集時間を奪つて仕上げました。最後まで私にやらせるとプロデューサーが決断してくれたときは涙が出ました。番組は一人だけのものじゃない。テレビつてそんなものだな、と思えます。

なものだな、と思えます。

今野 配布した資料の中に「主な制作番組」の一覧があります。これをみると、大石芳野、佐々木昭一郎、武満徹など個人の制作現場を描くものがいくつもある。これは、戦争や原爆のテーマとは違つシリーズだと思えますが、
右田 言われて初めて気づきました。佐々木昭一郎さんのドラマを私は入局前の80年代にみえています。ひとの心に残る映像、言葉、表情が佐々木ドラマの素晴らしいと教えられ、何故あんなものが出来るのか創作の秘密が知りたかつたのです。个性的なものを創り出すひとの気持ちの不思議さにとっても惹かれています。

今野 「好き」と言つていいのか、震災にかかわる作品のなかで僕があえて好きだと選んだのが「亡き人との再会」です。亡くなつた人が夢に出て来たのではなく、本当に出てきた。大震災の津波のあと再会した。それは不思議な話でなく、夢を見たのでもなく、体験として語られる。その体験が震災の後2、3年経つとあちこちで語られている。それを淡々と記録したドキュメンタリーです。「これは現代の遠野物語だ」と僕はどこかに書きました。あれの動機は？

右田 私は父をみとるとき1週間の時間がありました。それでもこんななのに、何千というもう会えないという体験をしている人たちはどうなんだろうと思つていました。震災報道の仕事をしているとき、大学で臨床宗教士

という、ひとの話聞いてあげる職業を作ろうという案があり、その話を聞きに行きました。家族を亡くした人は「もう一度会いたい。いや、会った。気配を感じた」と悲しみの中にいる。「会った、気配を感じた」ことを宗教家に話すと「まあ良かった」と収まり、前に向けて生きていけるというのです。それで、本人にとって事実ならいいじゃないか、と企画の提案をしたら先輩も認めてくださってあの番組ができました。

会場からの質問 1 コソボでセルビアとアルバニアの双方に取材していますが、セルビア人に取材したとき「アルバニア人は何と言っているか」と聞かれたことはないのですか？

右田 実際にはそんなことはありませんでした。しかし、キャンプでアルバニア人のハキムさんと再会したとき、嬉しくてハグしたらカメラマンの稲川さんはバランスを欠いていると思ったようです。その後、セルビア人のプラーナさんを訪ねたらドアは閉まっていた。しばらく通訳の人と待っていると稲川さんは「行け！」と合図する。つまり双方に同じように取材しろとのアドバイスで、とてもありがたかった。

会場からの質問 2 「400時間…」で「私は」と一人称で語られるところが出てきます。歴史番組でなく報道番組だからとのことですが、かつてはナレーションでもはつきり意見やメッセージを言っていたのが、最近では淡々と

と語られているように思います。何か変化があったのでしょうか？

右田 NHKも民放も番組はその局が出すもので個人の意見は出さないというのが一般論です。この番組で個人の意見が出たのは、スタッフ全員で討論してコメントを書き、責任を取ると決めたからです。今、それはどうか。特別な状況がないとできないのかもしれない。この時にはNHKから、局からといった高みからのメッセージは若い人には届かないという切実なおもいがあった、「私は」になりました。今もそれはやろうと思えばやれるし、それはスタッフ一同の覚悟が要ります。

今野 あれだけ若い人を死に追いやった大人たちが何にも責任を取らないことにたいして「おかしんじゃない」との感情になっていて、そのテーマについてはそれほど反発はないだろう。志願しての死だというのが、やはり国家が強制的に死だ。そのことについて責任を取らないのはおかし、とよく言ってくれた、と思っているだろう。

会場からの質問 3 「きのこ雲の下で…」の御幸橋の写真は何度も見ているのですが、写っている人が皆裸足に見え、本当に裸足だったのだろうかと思いましたが、今日の映像で確かに裸足だと確認できました。それで地面にはガラスの破片はなかったのでしょうか？

右田 御幸橋は壊滅した2キロ圏内の出口にあたり、大きな橋で、倒壊した家屋はなく、

瓦礫やガラスの破片もありません。それで避難していられた場所です。地面の状態について



ては研究所に煉瓦が保管されていて、研究しておられる方に取材しました。

会場からの質問 4 この写真を撮影した中国新聞のカメラマンの証言は得られなかったのですか？

右田 松重さんは90歳ほどまで生きておられ、いくつかの証言を残しておられますが、私たちの作業に役立てる情報はありませんでした。この写真に写っていた人を探し、その周辺の人を探して仕事を進めました。

会場からの質問 5 コソボのあの細い通りに焦点を当てようと、どんな時点で決めたのですか？

右田 最初はアルバニア人の幸せな故郷の生活を撮ろうと行くと、おうちがここで隣にセルビア人が住んでいる、前のアパートには誰が住んでいる、とだんだんわかってきました。地元の人にはそれぞれの人のことを詳しく知っていて、あの人は夫をセルビア人に殺されたとか、あの小さな場所にいるんなことがある。あの場所にしほったのは最後のころ、地元の人に「あの通りは何と云うの」と聞き、ハイダルドゥシイの名前を知りました。取材をしていた時は場所を意識せずに取材していました。

長谷川 時間になりましたのでこれで終わります。皆さん長時間ありがとうございました。

第47回 名作の舞台裏

科捜研の女 (テレビ朝日1999年)

日時・2月2日(土) 午後1時〜4時

場所・横浜市民文化会館・関内ホール・大ホール

ゲスト 沢口靖子 (出演) 内藤剛志 (出演)

戸田山雅司 (脚本) 桜井武晴 (脚本)

手塚 治 (プロデューサー・東映)

関 拓也 (プロデューサー・テレビ朝日)

司会・藤田知久 (放送人の会)

人気俳優の出演で参加申し込みが史上最高の4700名。定員千名の会場は熱気でむんむん。沢口靖子、内藤剛志が登場すると、「マ

リコー!」「やっちゃん!」「土門さん!」「ギャー!」とアイドルコンサートのような歓声である。

沢口靖子・挨拶 「皆さんこんにちは。(拍手)

今日は「名作の舞台裏にようこそお出でくださいました。そしていつも『科捜研の女』を

応援して下さい、ありがとうございます。(拍手) いま、登場した時の熱い拍手に胸が熱くなってしまう。今日はトークをゆつくりお楽しみください。」(長い拍手)

番組のデータ 番組の開始1999年10月

11日から今年で20周年。木曜のレギュラー枠で199本、スペシャルで12本、計211本を放送。累計視聴率2258・9%、平均視聴率12・127%。素晴らしい実績で、現行の番組では最長寿番組である。これまで

長寿番組はいろいろあるが、同一人物(沢口靖子)による、同一時間枠の放送では最長記録。沢口靖子による榊マリ子は放送回数を重ねるたびに新記録である。

沢口 人生の半分近くマリ子をやってきました。その間、脚本家の方が少しずつ大人の女性に成長させてくださいました。

司会 沢口さんが大事にしていることは?

沢口 真実を突きとめるための誰よりも強い情熱、信念を持つて諦めない姿勢です。

司会 女性の科学者が主演の警察ものは日本初、おそらく世界初だと思います。沢口さんは何の手本もない、ゼロからマリ子を創ってこられた。

沢口 いえ、それは脚本、演出、スタッフの皆さんのおかげですし、視聴者の皆さんに作っていた榊マリ子だと思います。

司会 マリ子は沢口靖子にしかできない、と

内藤さんが言ったと聞きますがそうですか?

内藤 そうです。断言します。マリ子は沢口靖子そのものです。

司会 内藤さんはシーズン2、通算の10話目からの参加です。

内藤 だから、やっちゃん(沢口靖子)にどう頑張っても9話分勝てない。

司会 十門の役柄は変わっている?

内藤 誤解されていますが、初め武藤要という役をやっていた、ラボの一員でしたが辞めて作家になり、それと別の役として十門が登場しました。この前スペシャルで武藤と十門

の二役が登場しました。つまり、役柄が変わったわけではなく、平行して二人の人間がいるわけです。ギャラは一人分です。(笑い)ですから、十門が死んでも武藤が出てきます。ご安心ください。

司会 今日上映した作品は脚本家の戸田さんと桜井さんにそれぞれ自分の作品から選んでいただきました。何故この作品を選んだかを伺います。

戸田山 一本しか選べないので『科捜研の女』の歴史を感じられるものを選びました。この番組では1度登場してそのシリーズには登場しなくても、しばらくして別のシリーズで登場することができる。今日の話はかつて殉職

した権藤刑事に若い木島刑事が憧れる、鷹城(宅間伸)というちょっとおかしな科学者が逮捕されるけど、のちにマリ子と縁ができる、といったものです。そんなキャストの話のつながりを感じていただきたい。殉職の碑に気づかれた方は多いと思いますが、一番新しい

殉職者が権藤刑事、その4つ前に木場俊介の名があります。これは小林捨侍が演じた初期

のシリーズのマリ子の宿敵の刑事ですが、この名が京都には残っていると知って欲しいと思います。

桜井 この番組は刑事ものとしては科学に特化しているのが特徴です。今日の作品は科学的なことがらがあつて進捗して行く物語で『科捜研』らしいと思えました。そして、

連続ドラマですから、「かつて偽造紙幣の事件

があつた」、藤倉が「これから大変なことが起こる」と言うなど、過去と未来をつないでいるものを選びたかった。

司会 科学的なことを物語のなかに盛り込むことは難しい?

戸田山 得手、不得手があります。私はミステリーからのアプローチで書きますが、桜井さんは「こんな新しい科学的なネタがある」と毎回持ち込んでくる。

桜井 私は科学に新しさだと思っていて、毎回新しい科学ネタを仕込もうとしています。科学論文はほとんど毎日のように発表されていますので、そのネタを探すのは難しくなく、悩みは手口と動機にギャップがあることです。ここまで特殊な科学的方法を使うと普通の人間ではないではないか、ということになる。普通の人間ではないとなると犯人がバレてしまふ。特殊技能を持った人間を途中で犯人ではないと視聴者をだますのは大変です。

司会 番組が始まったときのプロデューサー

東映の手塚治さんの話を聞きましょう。

手塚 テレビ朝日の木曜8時は長い間東映の時代劇をやっていたのですが、時代劇の視聴率が低迷して、現代劇をやることになったのが1999年です。その第1作が橋爪功の『京

都迷宮案内』で、4つ目のシリーズとして誕生したのが『科捜研』です。事件もので、科学ネタを入れるという条件だったわけですが、京都には島津製作所があり、いろんな計測器を作っていて、数千万円の器械をセット



沢口靖子氏



内藤剛志氏



戸山田雅司氏



桜井武晴氏



手塚治民氏



関拓也氏



司会・藤田知久氏

に提供していただきました。京都府警のホンモノの科捜研の方が見学に来て、「府警にもこれが欲しい」ということになった器械もある。つまりマリ子のラボはホンモノより2歩くらい先へ行っています。

戸田山さん、桜井さんが入っているいろんな苦労をしていると、1年後ハリウッドの「CSI I」がスタート。「パクられた」と思いました。それ程前例のないものを作って、いろんなブラッシュアップを重ねて今日があります。

司会 始まったころは「科捜研」という言葉は知られていなかった…

手塚 昨年のハロウィンの夜灘谷で車をひっくり返して騒いだ犯罪者を250台の監視カメラやビッグデータを使って逮捕しましたが、あれと同じことを第1話でやっています。

当時の京都府警の科捜研のラボは高校の理科室のイメージで、ひとけがなく、埃っぽい机に試験管が立っている、「これはテレビの画にならない」と思いました。しかし、ジュラルミンの大きな箱があり、説明を聞くと事件のとき試薬などを入れて現場へ持つて行くという。「これは使える」と思いました。白衣を着

た沢口さんが持つて行くあれです。**司会** S R Iのネームが入ったジャンパーがありますね。

手塚 第3シリーズのとき、チームの一体感を示すために作ったのですが、科学捜査研究所でもつさりしているからとS R Iになりました。ホンモノの京都府警にはありません。

司会 テレビ朝日が60周年です。

関 ありがとうございます。そして、「科捜研…」も20周年です。先日重大発表をしました

が、今度の4月からの「科捜研…」の新しいシリーズは通年放送、1年をとおして「科捜研…」を放送します。通年放送は久しぶり、「科捜研…」では初めてです。

司会 撮影は始まったのですか？

関 これからです。脚本はどこまで書いていただいているか…

戸田山 桜井さんとも話しましたが、4月からの1クールはもう話はみえていて、脚本は半分できています。

関 まだまだですね。1年分はどうでしょう？

桜井 これまで、秋から冬が多かったのです

が、1年となると春の京都、夏の京都、そこでのマリ子、その季節でしか成立しないトリックが書けます。フアイトがわかります。

司会 沢口さんは犯人役をやりたい、とか。

沢口 犯人像に共感して、魅力を感じるものがあります。「科捜研…」は事件の背景や、人間像が豊かに描かれていて、誇りに思っています。

司会 内藤さん犯人役は？

内藤 普通の人間が逸脱して行くのが犯人です。魅力があります。しかし、これまで90%が刑事でしたが、いまは100%です。皆さんに悪をやっつけると期待されているのですから刑事役を全うします。どこかのドラマで土門が人をぶっ殺したら皆さんいやでしょう。

司会 脚本はゲスト、被害者、加害者を丁寧に書くべきだと教わりました。

戸田山 被害者より加害者を書くのが難しい。人を殺すのはよほどのことですから、納得できる動機が必要です。Why done itを書く。マリ子はHow done itとその兼ね合いです。

桜井 放送時間との闘いです。ミステリーも

人間性も新しい科学ネタもと欲張ると時間が足りない。だから新しいゲストの心情だけを書くことはしない。ミステリーに絡めて、科学ネタに絡めて心情を書く。だから一つの台詞にいくつもの意味をつめ込みます。

司会 マリ子と土門の関係は一体どうなんでしょう？

沢口 二人でそんなことを話したことはありませんが、同じ大阪出身の、10歳年上の気さくなお兄さんにどーんと甘えています。ドラマの中では事件に立ち向かう姿勢、価値観が同じです。皆さんは恋愛を期待されているようですが、その手前の信頼と絆の深い関係です。

内藤 そうなんです。恋愛にならないんです。やっちゃんとは「ホテルウーマン」でどろどろの恋愛ドラマをやっていますが、土門・マリ子は二人の意識もありますが皆さんに作られた関係です。土門は刑事のカン、マリ子は科学で対立しますが、「科捜研…」は科学が必ず勝つ。土門は負ける。最初はそれで面白くやっていましたが、だんだん一緒にチームとしてやるようになりました。恋愛より素敵な男女の関係を作りたいと思っています。

第72回放送人句会

平成30年12月10日(月)◇於 赤坂・麦屋

◇出席 星野高士 伊藤視郎 林備後

荻野慶人 中村フミ 佐々木光野 深尾一化

近藤久二 以上8名

◇不在投句 新村もとを

◇兼題 数へ日、夜話、牡蠣、スポット(業界用語)

【星野高士特選】

数え日は指図しながらひとりごと

数へ日や路地の奥にも日の名残り

スポットの恋が行き交ふ忘年会

無職にも数へ日といふものはあり

スポットを浴びて一輪狂ひ花

夜咄の背戸に休めるとりけもの

生牡蠣の喉元過ぐる野性かな

夜咄や迷宮の闇に紛れる

【星野高士選】

牡蠣を喰ふ貴女の喉の白さかな

夜咄のけふは大山さまのこと

スポットの合間の廁外寒し

牡蠣をむく左の軍手破れけり

数へ日や悲劇喜劇のベストテン

平成も数へ日となる今年かな

夜話に耳傾きてテレビ消す

年の瀬をピンスポットに曝されて

牡蠣鍋や空席ひとつ杯捧ぐ

数へ日やルーティン守る猫の居て

三陸の牡蠣津波より復活す

光野

牡蠣樽を提げて新幹線のひと

夜咄の狐狸は旧夫婦

生牡蠣やフジタの裸婦の白き喉

行く年やスポットライトの灯が落ちて

夜咄は白い巨塔の田宮かな

この湾のこの牡蠣を喰ふ旅であり

数へ日や出るわ出るわの恨み節

お汁粉が出て夜咄のひと区切り

夜咄の尽きぬ新居のダイニング

引越して数へ日の家事増えにけり

数へ日や夜のニュースを最後まで

数え日に誕生日ある不しあわせ

数へ日を氷の如く踏む行者

【会員互選】

日を数へ心躍らす日々ありき

スポットはなくとも返り花二輪

夜咄が遠のく母の膝の上

牡蠣茸ぶきにか細き煙釧路川

数へ日の古木戸に太き釘を打つ

軍手から焼牡蠣落す白磁皿

海士小屋の夜咄し越えて潮しぶく

一斗罐牡蠣焼く海士の赫ら顔

つまみ出す牡蠣の破片や酒尽くる

スポットも番宣だらけ暮れテレビ

【選者吟】

数へ日の街角に息見失ふ

夜咄の続きは夢に持ち込まず

数へ日の靴音を追ふ靴の音

光野

備後

一化

慶人

光野

牡蠣フライ定食麻雀の帰り

みちのくの牡蠣にスポットライト浴ぶ

数へ日の句座にスポット人会員も

牡蠣飯に腹を満たすにあらねども

平成31年2月5日(火)◇於 赤坂・麦屋

◇出席 伊藤視郎 林備後 佐々木光野

近藤久二、深尾一化 以上5名

◇不在投句 鶴橋康夫、荻野慶人、新村もとを

◇兼題 いぬふぐり、白魚、鶯、キュー(業界用語)

白魚に透明な嘘ついでみる

去年までの鶯は来ず空地透く

引き潮の脇腹蹴上げ白魚跳ぶ

犬ふぐり夕べの風にやつれけり

鶯に元気づけられ八十路ゆく

白魚火の月光よりも淡く透く

透き通る白魚哀し一呑みす

うぐいすやお前いつ死ぬ俺は：昨日

いぬふぐり片足上げてあひまみへ

あなたたち父母いるのいぬふぐり

犬ふぐりよけて寝そべり青い空

門を建てて国境造るてふ余寒

鶯の籠る藪抜け惚ぶ会

鶯や少年刑務所そはの道

丘の上あかくにさんのいぬふぐり

空の色みつめる瞳いぬふぐり

白魚の犇めき掬ふ塗りの匙

野仏の謂はれは知らず犬ふぐり

雪の中お天気アナヘキューを出す

鶯に口笛ついに競い負け

訊ぬるも知る人はなしいぬふぐり

妹の指恥じらいていぬふぐり

胃に落つる白魚あはれと思ふ

白魚の小指いとしい佃島

次回放送人句会

○平成31年 4月9日(火) 17時半頃から

投句締切 18時半○会場 赤坂・麦屋(納屋)

○兼題 遠足 かへる 桜貝 ロケ(業界用語)

☆選者として星野高士氏が参加されます。

新入会員紹介(入会日順・敬称略)

小川和之(おがわかずゆき) 46年5月生。

NHK報道局、シンガポール支局長、報道局・

衛星放送部長、視聴者総局・企画部長、情報

公開センター長、(社)デジタルラジオ放送推進

協会・専務理事、日本電波塔(株)取締役・観光

本部副本部長、現在同社参与。

田中典子(たなかのりこ) 48年7月生。

小学3年〜高校生・NHK福岡放送局児童劇

団。東京女子大卒業後コピーライター2年間。

「マザーリング」「サライ」の編集、「NYフ

エステイバル」日本代表、現在・IAA日本

国際協会、放送批評懇談会。得意分野は雑誌

編集での広告業界・CM。

視郎

久二

備後

視郎

慶人

光野

康夫

康夫

久二

康夫

久二

康夫

久二

康夫

【あ】藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山悌三 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 【え】江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤雅充 【お】大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 大沢悠里 太田昌宏 大原れいこ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小川和之 小河原正巳 沖野瞭 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金澤敏子 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 【き】北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木原毅 木下浩一 木村成忠 【く】工藤卓男 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山帥人 近藤一男 近藤邦勝 今野勉 【さ】斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 新山賢治 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高田宏 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田中典子 田原茂行 【ち】崔銀姬 千葉邦彦 【つ】塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 富沢一誠 豊原隆太郎 【な】長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村芙美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】沼田通嗣 【の】信井文夫 延江浩 【は】萩原豊 橋本潔 林健嗣 林宣昭 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】日笠昭彦 玄武岩 【ふ】深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】逸見京子 【ほ】堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 薫りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑑一 三宅恭次 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】吉澤保 吉田策策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

編集後記

▼久しぶりの会報で、分厚い28ページになりました▼この会報の表記基準では数字は原則として算用数字としてきましたが、今回平成の終わりに触れる署名原稿が多く、しかも横書きの原文が多く、数字の表記法がいろいろです。表記の統一は諦めて、できるだけ原文に従いました▼「名作の舞台裏・科捜研の女」の情報がネットにいくつかの記事になっています。カラー写真が豊富です。「科捜研の女・トックショー」で検索するとヒットします。会報の記事とあわせてご覧ください▼昨年10月末、フルート・アンサンブルの演奏旅行でベトナム、カンボジャへ行きました。ベトナムはハノイですが、街中には2人乗り、3人乗りの信号無視のバイクが溢れ、若者が多い、元氣な国でした▼ベトナムの最近の経済発展を支えているものの一つが米で、いろんな品種の米が作られ、3期作（同じ土地に夏は米、冬は麦と別の作物を作るのが2毛作。同じ作物を作るのが2期作、3期作ると3期作である）がほとんど。国内で消費できない余分を安価で大量に輸出しています。3期作が普及したのは、優れた品種の米が手に入るようになり、灌漑が進んだからで、灌漑の技術については日本の農業環境技術研究所（現・農研機構）の分析、指導で堤防を作り、メコン河の水位が上がる洪水期の水位を調節できるようになったことが大き

いそうです▼米朝首脳会談がハノイで行われますが、ベトナムの川、水、コメ事情の報道はないものかと思いつながらニュースをみています（視）▼下馬評座談会の拾遺を兼ねて、賞の候補となり得る会員諸氏の近作テレビ作品を紹介しておきます。いずれも個性的でオリジナリティーの高い作品です▼今野勉演出の映像詩「宮沢賢治銀河への旅」働哭の愛と祈り。世評高い評伝の世界を、原作者自らの演出でテレビ化し、NHK・BS4K放送スターを飾る（2K放送は2月9日NHK・ETV特集での短縮版）▼片岡敬司演出の土曜ドラマ「みかづき」私塾経営で真の教育を目指す親子3代の人情喜劇（1月26日からNHK総合で連続5回シリーズ）。昭和と平成の波乱万丈物語▼中崎清栄・辻本昌平のコンビのドキュメンタリー「行列ができる婆ちゃんコメント」（1月15日NNNDドキュメント、テレビ金沢制作）。身近な人との共感と笑いで癒されたい高齢女性たちの現実を活写▼市村元プロデュース「地方の時代」映像祭のグランプリ受賞作「菜の花の沖縄日記」（沖縄テレビ制作）は、本土から留学した中学少女・菜の花さんが体験する沖縄人のやさしさと苛酷な現実のドキュメンタリー（2月2日NHK・Eテレの特番が映像祭の熱気を伝えて秀逸）▼相田洋畢生の大作「南米移住50年目の乗船名簿」4回シリーズ（ETV特集）は座談会記事を参照ください（典）